

火国の領域設定と鞠智城

小嶋 篤

はじめに

平成二七年度（二〇一六年）の調査研究では、①「大宰府の軍備に関する考古学的研究」（平成二五）二七年度科学的研究費助成若手研究B）、②「鞠智城築造前後の軍備」（平成二七年度鞠智城跡「特別研究」）、③「兵器の様相から見た古代山城」（「古代山城に関する研究会」熊本県教育委員会）を実施した（小嶋二〇一六a,b,c）。これらのうち、鞠智城に関する研究では、西海道における公的な備蓄兵器と兵士自備の兵器の実態を別個に検討した上で、『日本書紀』記載の戦術・戦略や鞠智城跡の施設・土地利用・自然環境・可視領域を論拠として、戦術的運用に限つた鞠智城の防衛設計を追究した（第1図）。本研究過程で改めて重要視できたのは、向井一雄氏も注目する米原台地周辺の地形（迫地）、すなわち、鞠智城周辺の地勢的理解である（向井二〇一四・小嶋二〇一六b）。米原台地は古墳時代後期（六世紀後半）には生活圏となつており、台地・迫地・低地に応じた土地利用の痕跡から、当該期に地勢的理解の醸成が認められる。木村龍生氏も古代山城出土土器を網羅的に時系列で整理した上で、「鞠智城も白村江の戦い後にそれまであつた施設に土塁、城門、貯水池などを急造し、倉庫や兵舎等の建物を建造することで、城として再整備した」と想定しており、前段階との連続性に注視する（木村二〇一六・二〇一八）。このように、鞠智城を構成する要素

には、朝鮮式山城の築造技術・律令的複合冶金工房等の新来要素とともに、古墳時代に醸成された地勢的理解という旧来要素も併存しており、両者が有機的に組み合うことで鞠智城の防衛設計が成立している。この旧来要素は鞠智城の設計に菊鹿盆地の人々が携わることで果たされた。具体的に踏み込めば、倭政権（中大兄皇子称制政権）の指令を受けた筑紫大宰管轄下において、火国宰や鞠智評造に任命されていた豪族も鞠智城の設計・築造に参画したことを見定す。本仮説は「地域勢力築造説」に組みするものではなく、また折衷説でもない（註1）。築造主体は倭政権であり、火国宰や鞠智評造も政権を構成する地方官僚として参画していることを強調しておこう。狩野久氏が想定したように、「築城には大化以来つくられつた國・評・五十戸の統治機構がフルに活用された」と見る（狩野二〇一〇）。

本研究では、日本列島に見られる古代山城（倭国仕様大陸山城型城郭）について戦術的運用と戦略的運用の特徴を別個に整理した上で、火国の領域設定と筑紫国・火国の軍事動員の歴史から、築造期における鞠智城の役割を追究する。

鞠智城築造前後の軍備に関する考古学的研究（平成二五）二七年度科学的研究費助成若手研究B）、「古代山城に関する研究会」（「古代山城に関する研究会」熊本県教育委員会）を実施した（小嶋二〇一六a,b,c）。これらのうち、鞠智城に関する研究では、西海道における公的な備蓄兵器と兵士自備の兵器の実態を別個に検討した上で、『日本書紀』記載の戦術・戦略や鞠智城跡の施設・土地利用・自然環境・可視領域を論拠として、戦術的運用に限つた鞠智城の防衛設計を追究した（第1図）。本研究過程で改めて重要視できたのは、向井一雄氏も注目する米原台地周辺の地形（迫地）、すなわち、鞠智城周辺の地勢的理解である（向井二〇一四・小嶋二〇一六b）。米原台地は古墳時代後期（六世紀後半）には生活圏となつており、台地・迫地・低地に応じた土地利用の痕跡から、当該期に地勢的理解の醸成が認められる。木村龍生氏も古代山城出土土器を網羅的に時系列で整理した上で、「鞠智城も白村江の戦い後にそれまであつた施設に土塁、城門、貯水池などを急造し、倉庫や兵舎等の建物を建造することで、城として再整備した」と想定しており、前段階との連続性に注視する（木村二〇一六・二〇一八）。このように、鞠智城を構成する要素

一・古代山城の軍事的役割

(一) 戰術と戦略

古代山城に限らず、諸施設は多面的かつ複合的な性格を有する場合が往々にしてあり、時系列での変容が生じる場合もある。井上翔氏が述べるように、「（鞠智城の役割や性格は）多方面に向いており、一面のみに帰せようとするのは不毛な議論」と言えよう（井上二〇一六）。この点を認識した上で、鞠智城の役割を把握しようとすれば、各役割を個別に追究し、それらを時間軸に沿って批判統合することが有益な研究手法である。平成三〇年（二〇一八）に開催された古代山城シンポジウム『古代山城の成立と変容』における亀田修一氏の基調講演は、「古代山城未完成論」を組み込みながら、遺物・遺構研究を総括的に統合しており、古代山城の時系列的整理の到達点がよく把握できる（亀田二〇一九）。また、鞠智城については矢野裕介氏による役割・機能の時系列的整理が模範となる（矢野二〇一八）。

冒頭で述べたように、筆者は築造時（七世紀第3四半期）における鞠智城の複合的な性格のうち、戦術面での軍事的役割を追究してきた（小嶋二〇一六b,c）。その過程では「戦術」と「戦略」を意識的に区分し、両者の混同を避けるよう心掛けた。筆者が認識する戦術と戦略の定義を述べると、戦術とは「戦闘（局地戦）の直接目標を実行するための手段」であり、戦略とは「各地の戦闘を統合し、戦争を全局的に運用するための手段」である。本認識に基づいて、鞠智城の軍事的役割を整理すると、戦術的運用範囲はほぼ菊鹿盆地に限定でき、有明海防衛には全く機能しないと断言できる（木村二〇一四・二〇一八、小嶋二〇一六b・矢野二〇一九）。一方で、

戦略的運用範囲は官道や烽を介して、他の古代山城・官衙等と組み合うことで広範囲の有明海防衛構想に組み込まれていたとも評価できる（矢野二〇一九）。このように、同じ軍事的役割でも議論の次元を違えれば、相反するかのような評価が導き出されるため、建設的な議論のためには両者を峻別する必要がある。

(二) 天智紀における古代山城の戦術

古代山城跡を用兵的観点から研究した出宮徳尚氏は、日本列島の古代山城について「城郭構造の面からの視点では、中国中心地や朝鮮半島に展開する実戦配備の城郭の、倭国社会に活用可能の要素だけ変質化した導入と判断でき、倭国の政治情勢に基づき、城郭という軍事施設の導入が招請された時点で築城された、倭国仕様大陸山城型城郭と評価すべき」という結論を導き出した（出宮二〇〇二）。本結論はおおいに賛同でき、古代山城未完成論とあわせて、今後の研究視点として継承する必要がある。ただし、出宮氏は城壁が「日本古代山城では守城側兵力展開の最前線」とするが、運用兵器や古代山城の運用時期に編纂された『日本書紀』記載の集団戦闘（戦術面での合理的思考）、および古代山城の施設・地形・官道との接続等の複合的検証からは、守城側兵力展開は城壁内に限らず、進軍速度の速い交通路を重点的な迎撃地点に構想していたと判断できる（小嶋二〇一六b,c）。具体例を挙げると、急峻な迫地に囲まれた鞠智城では、兵力展開を城壁範囲内（狭域説範囲内）に限ると、可視領域の狭さにより台地裾や迫地内の敵軍把握が遅れ、防衛戦の最終局面とも言える城壁上での対処的戦闘にも支障をきたしてしまう（第1図）。すなわち、倭国仕様大陸山城型城郭を戦術的に運用する際には、倭国伝統的な戦闘方式に沿うことが構想されており、



第1図 鞠智城の戦術的運用範囲と防衛設計（小嶋2016b）

施設だけではなく、戦術設計においても「倭国仕様」であったと考える（註2）。軍団制整備以前の倭国（中大兄皇子称制段階の倭国）は防人・烽の本格整備という新施策もあるが、軍事力の基盤は依然「評造軍」にあり、兵制の抜本的改革には時間を要したことを見忘れてはならない。律令体制の確立という理念を抱きつつも、築造期における古代山城の戦術的運用では、評造軍の動員という現実的対応が構想されていただろう。

上記は公約数的な結論であるが、立論の基軸になつてているのは各古代山城や運用兵器の個別分析結果であり、今後もより詳細に実態を追究していく必要がある。向井一雄氏も年代論・築城主体論の次フェーズの研究段階へステップアップしていく上で、中世城郭における縄張り研究と同じ視点を持つて各遺構を分析する必要を説く（向井二〇一九b）。ただし、中世城郭における縄張り研究の視点を援用する際には、時空間的な違いを認識し、築造時（七世紀後半）における戦術面での合理的思考や運用兵器の構造・数量等の諸条件との照合を経る必要があると考える。また、より緻密に論拠を積み上げるには、兵士各人の身体的動作（戦闘形態）も追究していくかなければならない。戦闘形態の解明に対する試みは、藤原哲氏が弥生時代～古墳時代にかけて実施しており、殺傷人骨の分析も組み込んだ具体的な戦闘像を描き出している（藤原二〇一八）。「古代山城未完正論」や「見せる城論」とともに、運用兵器・戦闘形態の研究成果を、各古代山城の立地環境・自然地形・遺構等の分析に還元することで、向井氏が展望する研究段階のステップアップが期待できる（亀田二〇一四・向井二〇一七・小嶋二〇一六bc）。

(二) 天智紀における古代山城の戦略

国家・大宰府が重要視した古代山城（大野城・鞠智城等）は、七世紀後半の築造後も繕治等を経て、長期間運用された（亀田二〇一八）。この長期間の運用では、各時期の社会情勢に応じて、為政者の戦略も変遷する。本研究の主眼は、古代山城築造時における領域観から鞠智城の役割を追究することにあるため、天智紀に限った古代山城の戦略を整理する。

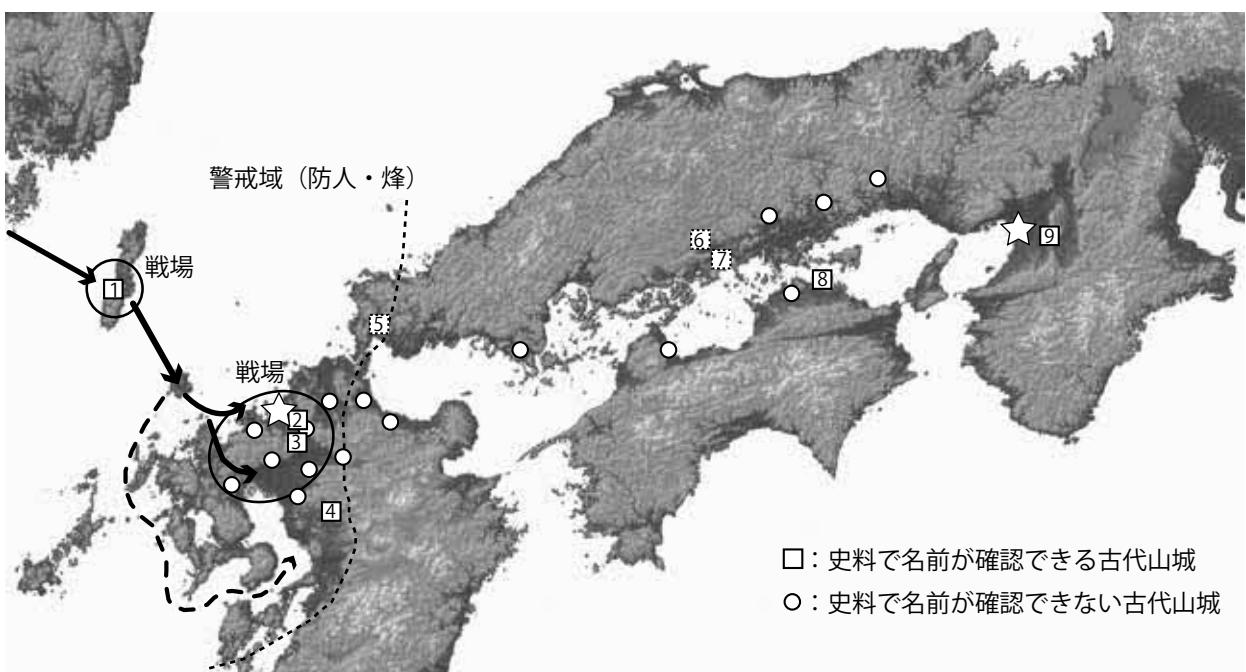
当然ながら、戦略は社会情勢と不可分な関係にあり、百済の役（百済救援戦争）以後の外交と内政の双方を把握する必要がある。本把握については、小田富士雄氏により大宰府都城の形成をにらみつつ、年月日別の時系列整理がなされている（小田二〇一六・二〇一八）。小田氏の整理では、六六四年五月一七日の唐国の百済鎮将劉仁願の遣使を経て、当座の外敵襲来危機の回避を確認した後、水城の築造、すなわち大宰府都城の外郭築造が開始されたことを明示する。また、六六四年六六五年の水城・大野城・基肄城の築造を第一次防衛網、六六七年の金田城・屋島城・高安城を第二次防衛網と位置づけ、まことに古墳時代にかけて実施しており、殺傷人骨の分析も組み込んだ具体的な戦闘像を描き出している（藤原二〇一八）。古代山城未完正論」とともに、運用兵器・戦闘形態の研究成果を、各古代山城の立地環境・自然地形・遺構等の分析に還元することによって、向井氏が展望する研究段階のステップアップが期待できる（亀田二〇一四・向井二〇一七・小嶋二〇一六bc）。

より具体的な戦略的運用では、亀田修一氏が提示した「高安城の変遷モデル」が注目できる（亀田二〇一八）。『日本書紀』の記載に基づくと、六六七年の築造後の六六九年に田税、六七〇年に穀物と塩を城内に納めたことが確認でき、第一・二次防衛網の戦略的運用

の一つとして、備蓄食料の保管が認められる。このような食料備蓄機能については、鞠智城の役割として重要視されており、「菊鹿盆地の米の確保、そしてそれを備蓄し必要に応じて最前線等に搬出するための後方支援基地であった」と評価される（木村二〇一八）。

また、対外防衛の最前線拠点である対馬・金田城も、天智紀における古代山城の戦略を探る上で注視できる。小田富士雄氏は第二次防衛網とする金田城について、大宰府都城の北限の護りと位置付け（小田二〇一八）。「護り」の具体的戦略については、出宮徳尚氏の指摘が重要で「半島から倭国に至る海上ルートの門戸の背後に、正面装備の軍事施設の整備を顯示し、唐軍来襲時には籠城による残留後方攪乱活動の拠点」と想定した（出宮二〇〇〇二・二〇一〇）。金田城が面する浅茅湾は、『万葉集』（卷一五・三六九七）で「百船の泊つる対馬の浅茅山しぐれの雨にもみたひにけり」と詠まれたように、最前線の大規模港湾であった。この大規模港湾が占領状況に陥るか否かでは、筑紫（大宰府都城）への進軍速度・派兵数に顕著な違いが生じることを、百濟救援戦争で大規模派兵を行い、かつ金田城を築造した倭政権は熟知していたと見て間違いない。六六四年に對馬島・壱岐島・筑紫国等に烽と防人が配されたのは、本航路が弥生時代より一貫した主要航路であったことに起因することは多言を要さない。失敗の許されない大規模派兵に限れば、天智紀における対馬島・壱岐島・筑紫国等の航路は倭と唐・新羅をつなぐ、最重要航路であつたと考える（註4）。

以上、天智紀における古代山城の戦略において、「律令体制の整備」、「対処的施策である防衛網の形成」、「食料備蓄」、「進軍阻害」という構成要素を抽出した。このうち、律令体制の整備は大化以来



1：金田城 2：大野城 3：基肄城 4：鞠智城 5：長門城（推定地） 6：常城（推定地） 7：茨城（推定地）

8：屋嶋城 9：高安城

※有明海航路は交易路としては問題ないが、進軍路とする場合は視認率が極めて高い短所を有する。使節等で渡航実績もある対馬島・壱岐島・筑紫国が最有力進軍路と想定されていただろう。

第2図 古代山城の分布と対唐・新羅軍の想定主戦場

志向されてきたものであり、百濟の役を経て、結果的に整備速度を加速させたと評価できる。当座の外敵襲来危機の回避が見込まれた段階で実施した「見せる城」とも言える外観威容（大宰府都城外郭）の整備は、倭政権が唐・新羅との外交を優位に進める上でも利用した新戦略であった（小田二〇一六・二〇一八）。ただし、この新戦略の実施は、既存の統治機構（国・評・五十戸）の運用により果たされたと見られ、対処的施策でつくられた防衛網を機能させる軍事動員も既存の評造軍に依拠せざるを得ない。つまり、百濟の役における敗戦を経て、時間的制約のある倭政権は戦時侵攻体制を軸に、戦時防衛体制に移行せざるを得なかつたのが実情である。戦時侵攻体制とは、古墳時代後期（六世紀）より培われてきた派兵方式であり、「拠点施設（官家・屯倉）に食料を運び込み、同地に国造軍を集結させながら適宜派兵する方式」である。本派兵方式は百濟救援戦争における大規模派兵と同質であり、難波・瀬戸内海・豊・筑紫・壹岐・対馬・朝鮮半島南岸という進軍路、および九州北部の各拠点への食糧備蓄・軍勢の集結という点でも重なる。このような視点で、敗戦後の戦時防衛体制で築かれた防衛網（古代山城の分布）を眺めると、進軍路・食料備蓄・軍勢の集結という諸属性が重複することに気が付く。つまり、伝統的とも言える戦時侵攻体制（屯倉を整理統合した評制・ミヤケネットワーク）に、広域行政官（大宰・総領）・倭国仕様の都城・倭国仕様の大陸山城型城郭・防人・烽を段階的に乗せしたもののが、百濟の役後の戦時防衛体制（第一・二次防衛網）であったと結論できる。出宮徳尚氏は屯倉を古代山城の後方兵站地と想定するが、むしろ、実際の戦時防衛下においては評（屯倉）がもつ兵站・行政機能を古代山城へ移行する戦略であつたと考える。

屯倉・評倉は物資搬入・搬出の利便性から、交通路の要衝に位置するが、防御施設が未発達なこともあり、物資防衛には不適格と言わざるを得ない。唐・新羅軍の来襲のような侵略戦争において、警戒されるのは兵站の現地調達（略奪）である。ミヤケネットワークによる物資集積と国造軍動員を重視してきた倭政権にとつても、兵站の守衛は戦時防衛体制の要であつただろう。また、集積した田税は倭政権の財産そのものであり、為政者の関心が高い物資であつた。

（四）小結

上記では天智紀の古代山城について、戦術と戦略に分別して整理した。倭政権（中大兄皇子称制政権）の戦略として、「戦時侵攻体制（評制・評造軍）」を対処的に改変して戦時防衛体制を構想した」と考えた。ただし、戦時と表記しているが、結果的に倭国への侵攻はなされず、戦時防衛体制は平時のまま推移する。そして、壬申の乱を経た政権交代により、天武天皇の軍制改革（兵政官の設置、官人武装化、軍事教練、武器収公（指揮具中心）等）、持統天皇の飛鳥淨御原令発布（徵兵制の施行）が遂行され、天智紀に敷かれた戦時防衛体制は、動員方式の変更（軍団制の導入・備辺式の策定）、古代山城の取捨選択（廃城と改修）、大宰府都城の改変（条坊制の施行）等を経て、律令制下の新たな国土防衛体制（平時防衛体制）へと生まれ変わる（小嶋二〇一一・二〇一四a b・二〇一六a・二〇一八b）。

本節の結びとして、古代山城未完成論について触れておく（亀田二〇一四）。百濟救援戦争後の防衛体制として、対処的に構築された第一・二次防衛網は平時のまま推移する（小田二〇一六）。このため、構想としての戦略を完遂する必要はなく、天智紀においても古代山城の築城・山城内の食糧集積は、利便性の悪さから未実施・規

模縮小・築造中止等の計画変更がなされたと考えられる。あくまで、「戦時下に兵站・行政機能を古代山城へ移行する戦略」だからである。仮に平時において有機的に機能した施設であれば、天武・持統紀以後の統治機構から排除されることはなかつただろう（稻田二〇一二）。平時での戦略に組み込まれた古代山城のみが、防衛施設としての機能を減じながら存続することになったと考えられる。

二、火国の領域

(一) 古墳構築技術と領域

天智紀（中大兄皇子称制政権）の古代山城を用いた防衛戦略において、「対馬島・壱岐島・筑紫国」の進軍路、「国・評・五十戸」の統治機構、「評造軍」の動員が基軸であつたことを確認した。では、本戦略の基礎となつた倭国の領域観は、どのような歴史的経過を経て形成され、どのような実態を有していたのか。本節では鞠智城が所在する火国（肥後国）を中心に検討する。火国、後の肥後国は「対馬島・壱岐島・筑紫国」の進軍路の外縁にあり、鞠智城は現在所在が確定している古代山城群の最南端に位置する。だからこそ、築造期の古代山城の役割を追究する上で有益な情報を得ることが期待できる。

(二) 横穴式石室墳の研究視点

横穴式石室墳を時空間的に把握するには、「古墳建築（古墳分類）」を視野に入れた上で、古墳構築技術（石室石積み・墳丘構築）と石室空間設計を別個に分類し、双方を組み合わせる研究手段が有効である（小嶋二〇一二・二〇一八c・一〇一〇a、重藤二〇二〇）。本分類の根拠となるのは、構造物として遺された石室や墳丘の「形」であるが、筆者が念頭に置いているものは、「人間が物を作る際の集団行動方式（範型）」である（小林一九九四）。つまり、横穴式石室墳をつくる際に、「どのような手順で、どのように石と土を積むのか」といった行動や思考を分類の柱としている。このような分類を厳密に突き詰めていけば、その最小単位は墓域内に隣接する同一

令制下における国・郡（評）の領域設定は、古墳時代以来の豪族と私有民（部曲）の主従関係を強く反映する場合が多く見られる。筑紫においては、神郡となつた宗形郡が典型例であり、『続日本紀』等の文献史料から奈良時代にいたるまで宗形氏（宗形朝臣）一族による郡司・神主の独占という実態がうかがえる（亀井二〇一二）。その郡域は、横穴式石室墳・葬送儀礼（土器の非副葬・墳丘供獻）・

須恵器・土師器・装飾付大刀・沖ノ島系祭祀遺物等の考古資料の分布域と重なつており、古墳時代後期（六世紀）には、宗形郡の母体（宗形君と宗形部の主要居住域）が成立していったことが複数資料・史料の相互検証から明らかになっている（小嶋二〇一二・二〇一九a等）。冒頭で記したように、火国は肥前国・肥後国分割以前は、筑紫国的一部を挟む形で環有明海の南北に広がる特異な領域を形成しており、地理的区分とは異なる人的結合が介在したと見てよい。このようないくつかの分析方法の一つとして、本研究では横穴式石室墳に注目する。古墳時代後期以降の大型古墳（横穴式石室墳）の建築では、①血縁集団と②部曲が動員の主軸であつたと考えられ、人的結合の検証素材の一つとして、古墳構築技術の分布域を把握することは有益である（小嶋二〇一八a）。なお、①血縁集団と②部曲の動員方式は、国造軍の動員方式と重複する点も注目できる（註5）。

条件を同じくし、造墓人員の多くが重複するためである。柳沢一男氏が述べるように、六世紀前半以降の九州の横穴式石室は「多様化と小地域内でのまとまりなどによって築造系譜が錯綜している」（柳沢二〇〇九）。この錯綜した状況を過不足なく整理するためには、広域的な系列把握や他墓制（横穴墓や地下式横穴墓等）との連動把握と並行して、墓域の形成過程をふまえた細部の系列把握を積み上げねばならない。古墳構築技術の範型と石室空間設計を分離・統合する研究方法とは、その二つの作業を双方向的に進める手段である。以下では、火国（肥後国）の横穴式石室墳を検討していくが、まずは石室空間設計を整理する（柳沢二〇〇三）。なお、下記が筆者の最新分類である。

【単室無羨道石室】 玄門外側に羨道が接続しない単室の横穴式石室。

【単室短羨道石室Ⅰ類】 玄門外側に短い羨道が接続する単室の横穴式石室。いわゆる羨道が未発達な横穴式石室が該当する。羨道床面に仕切り石を敷設しない。

【単室短羨道石室Ⅱ類】 玄門外側に短い羨道が接続する単室の横穴式石室。羨道床面に仕切り石を敷設し、羨道分割を行うが、羨道側壁に袖石を配さない。

【単室長羨道石室Ⅰ類】 玄門外側に長い羨道が接続する単室の横穴式石室。羨道床面に仕切り石を敷設しない。

【単室長羨道石室Ⅱ類】 玄門外側に長い羨道が接続する単室の横穴式石室で、羨道中央付近に仕切り石を敷設し、羨道分割を行うが、羨道側壁に袖石を配さない。

【複室石室Ⅰ類（羨道間仕切り型複室）】 玄門外側に袖石と仕切り

石で区画した前室が接続する複室の横穴式石室のうち、前室の横幅が羨道の横幅と共に通するもの。

【複室石室Ⅱ類（羨道拡大型複室）】 玄門外側に袖石と仕切り石で区画した前室が接続する複室の横穴式石室のうち、前室の横幅が羨道の横幅より拡大するもの。

以上の石室空間設計の分類と、分析過程上で分離した古墳構築技術の範型を統合して、各資料を整理する。例えば、肥後型の古墳構築技術を用いて、複室石室Ⅰ類の空間設計をつくり上げた事例では、「肥後型複室石室Ⅰ類」と表記する。同じ複室石室Ⅰ類の空間設計でも、筑後型の古墳構築技術を用いていれば、「筑後型複室石室Ⅰ類」となる。このように古墳構築技術と石室空間設計の双方を等価に評価することができる。

(三) 肥後型の古墳構築技術と石室空間設計

九州北部は日本列島における対外交流の主要な窓口であり、多くの外来文物が見られる。古墳の埋葬施設である横穴式石室もその一つである。畿内を中心とする前方後円墳墓制下において、九州北部の人々は独自の対外交流を経て、竪穴式石室に見られる合掌形天井を組み合わせた「北部九州型横穴式石室」を生み出した（高木一九九三、柳沢一九九〇・二〇〇五）。また、九州西部では穹窿状天井（ドーム状天井）という朝鮮半島の特徴をより強く遺した「肥後型横穴式石室」も同時期に成立する。この肥後型横穴式石室が火国（後の肥後国領域）の主軸となる古墳構築技術の範型となる（第3図）。ただし、筆者の「肥後型」の定義は、重厚な研究蓄積や調査図面・写真がある石室石積みの情報を基軸とするが、石積みと連動する墳丘建築の情報を等価に組み込むことで「古墳構築の範型抽出」

を志向していることを強調しておく（藏富士一九九九・二〇〇七a b・二〇〇九・二〇二〇、甲元二〇一七・二〇一九a、古城二〇〇七・二〇〇九a b・二〇一〇・二〇一一）。

【肥後型（肥後中期型・肥後後期型）】

石材…凝灰岩・安山岩・砂岩・片岩板材を基本石材とする（高木一九九九）。古相では石障、新相では玄門・前門・閉塞石・石屋形等で石材の成形・表面調整・施文を行う他、壁面石材や天井石の切石加工も行う。ただし、石材加工率は階層差や系列差と絡みながら、古墳毎に異なる。

墓坑…古墳時代中期後半（TK47型式期）以前では、土手状盛土を成形した後に墓坑を掘り込む構築手順が塚坊主古墳で確認できる。墓坑の掘削深度はおおむね石屋形側壁と類似する。古墳時代後期以降は良好な調査事例はないが、御靈塚古墳等の墳丘盛土状況から墓坑の掘削深度は浅いことが把握できる。また、墳丘未調査古墳の踏査所見も勘案すると、墓坑の掘削深度は最大でも腰石程度と見られる。

調査数が少ないため、墓坑掘削の違いが時間差・集団差・階層差・地質差等のいずれの要因に起因するかの検証が不十分であり、実際には集団差や階層差等によって前後関係が逆転する事例も内包すると見られるが、大局的には墓坑掘削の違い（古墳構築手順・作業空間等）の違いは時間差（技術改良）と想定する（笠瀬二〇〇四）。

作業制限…古墳時代中期後半以前は、すり鉢状に窪んだ土手状盛土の中心に掘削した墓坑内で石室石積みを行う。墓坑外は足場が不安定なため、基本的には墓坑内での石屋形設置・石積み作

業と見られる。また、墓坑周囲に土手状盛土が存在するため、壁面下部での石材搬入路は石室開口方向が有力視できる。壁面上部では、壁面石材と土手状盛土の間に裏込め盛土を水平に積み、同部分を作業面（石材仮設置場）に利用したと判断できる。

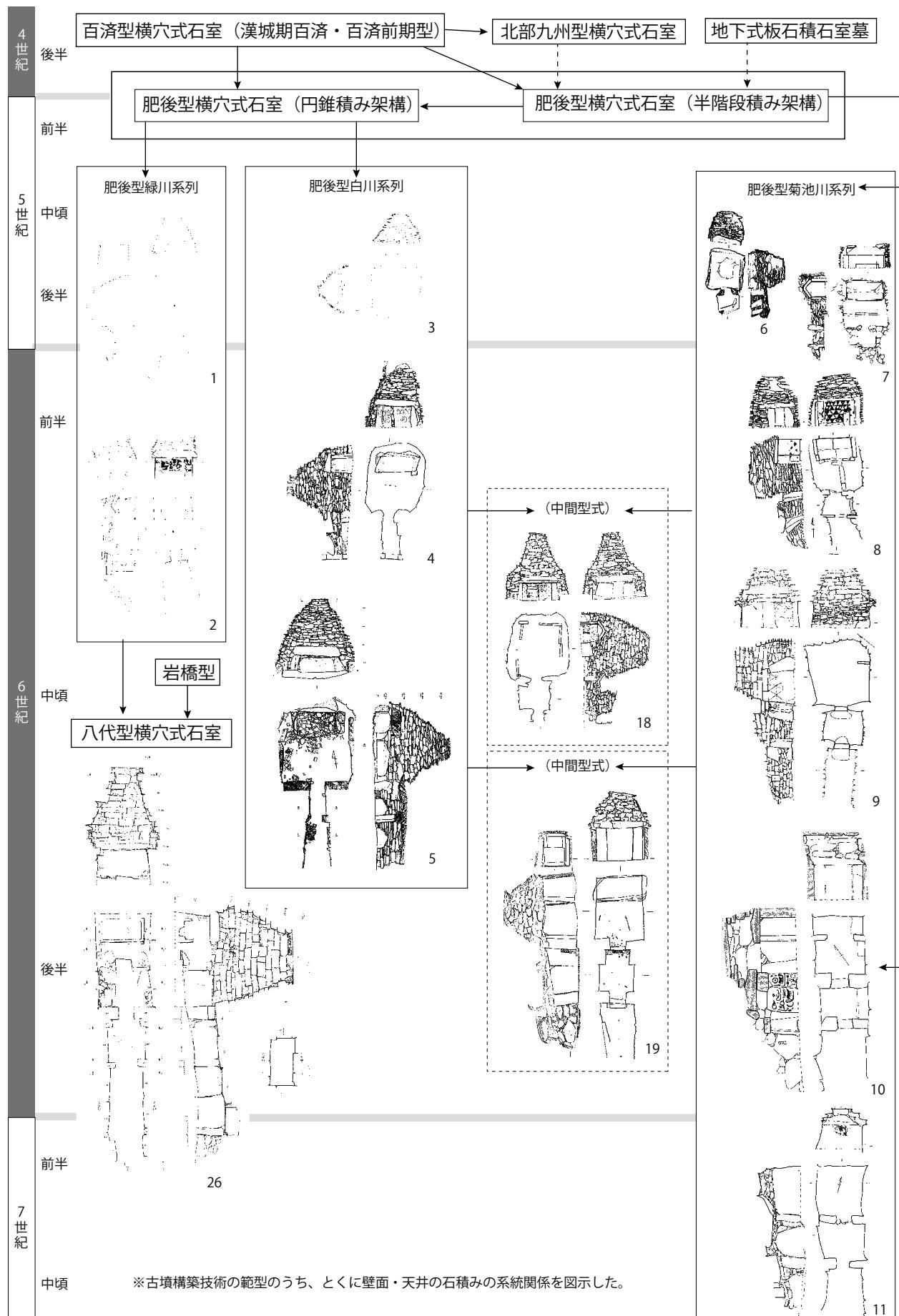
古墳時代中期後半以後では、墳丘盛土に先行して墓坑掘削を実施するため、壁面下部では墓坑内外から石を積むことができる。壁面上部の作業では裏込め盛土上での作業が基本となる。

袖部…古墳時代中期前半においては、板石平積みで玄門部を構築する（第5図）。古墳時代中期後半の肥後南部では、玄門平積みを覆う化粧板石が確認できる。肥後北部では北部九州型石室と共に通する立柱石が採用される。古墳時代後期になると、さらに様相は複雑となり、屍床を玄門に取り込んだ二重袖石や、石棺前壁を取り込んだ割り貫き玄門・独立立柱石も加わる。

壁体…古墳時代中期では石室内に石障を配するため平面方形を基軸とするが、古墳時代後期前半には上部石積み（穹窿状天井）をにらんで平面形が湾曲する事例が増加する。小型板状石材の水平積みを基軸としながら、古墳時代中期後半以降は切石積みや腰石・石屋形・石棚も利用する。なお、石屋形・石棚は壁面の重量負荷分散に効果はあるが、壁面維持に不可欠な存在ではない（藏富士一九九七・二〇〇二・二〇一〇）。

持ち送り…古墳時代中期以来、板石利用による小単位の横目地を利用した微調整が可能である。玄室下部では埋葬空間確保のため、持ち送り角度は小さい。おおよそ石屋形上端、石棚・玄門眉石の架構位置（力学的安定面）から持ち送り角度を大きくし、穹窿状天井を構築する。隅消しを志向するが、部分的に隅角（縦





第3図 肥後における横穴式石室墳の系統関係 (S=1/300)

目地) を残すものも多い。

天井石の搬入・古墳時代中期では土手状盛土上を経由して、裏込め盛土上に引き上げる。傾斜度は大きいが、裏込め盛土上面が水平に近いため安定した足場で作業ができる。また、穹窿状天井の長所を活かし、石室床面規模に比べて、天井石は小型になる。また、八代海周辺では大型板石を階段状に積み上げて天井を塞ぐ架構も見られる(第4図)。古墳時代後期は墓坑が浅い状態で、天井石を裏込め盛土上に引き上げる必要がある。丘陵斜面の最大限利用を想定すると、墳丘後背部からの引き上げが有力視できる。

墳丘盛土・古墳時代中期後半(TK47型式期)では、土手状盛土を利用した「西日本の工法」を応用した盛土が確認できる(青木二〇〇三)。古墳時代後期に主体となる墳丘盛土は、墳丘拡張型と見られ、かつ墓坑掘削深度が総じて浅いことから盛土量が多い。盛土の流出を防ぐための墳丘内石列や土塊列等の利用が想定できる。

以上、古墳構築の視点から肥後型を再定義したが、古墳時代中期後半から後期前半にかけて、墳丘優先建築から石室優先建築への変遷が想定でき、作業空間や石材搬入路等を含めた作業手順に違いがあることを示した。本視点は今後の調査蓄積を経て、範型の分離(肥後中期型・肥後後期型)を想定しておく必要がある。

次に肥後型と組み合う石室空間設計は多様で、時間差と集團差が絡みながら展開する。時間差で見れば、大局的には単室無羨道石室・单室短羨道石室I類・单室長羨道石室I類・複室石室I類・複室石室II類へと多様化する。また、古墳時代後期

の石室空間設計では、火国内部での集團差が把握でき、菊池川流域では複室石室II類、緑川流域では複室石室I類、宇土半島・天草諸島・八代海沿岸では複室石室I類に加えて、单室短羨道石室I類が主体的に採用される(古城二〇〇七)。

(四) 宇土型の古墳構築技術と石室空間設計

日本列島における横穴系埋葬施設の導入には、大きく四つの方向性が内包されている(小嶋二〇一八c)。筆者が考える四つの方向性とは、「百濟型石室を導入する方向性(肥後型石室・畿内型石室)」「豎穴式石室に横口を取り付ける方向性(北部九州型石室・豎穴系横口式石室)」「石棺に横口を取り付ける方向性(横口式石棺)」「横方向から埋葬施設を掘削する方向性(横穴墓・地下式横穴墓)」である(註6)。これらは横方向の出入口という新施設の附加を基準とした方向性であるが、同時に天井構造とも相関関係にある。その要因は、横方向からの主体部内への入退室・葬送儀礼の実施が、玄室空間の拡大を促すことで、天井部をいかに維持するかという構造的課題と直面する点にある。

横穴系埋葬施設化の最も効率的な方法は、「百濟型石室を導入する方向性(肥後型石室・畿内型石室B類)」である(高木一九九三・柳沢一九九〇)。すでに完成している構築技術を導入することで、出入口と天井構造の問題は解消される。穹窿状天井は半球体の造形美に加えて、天井石の小型化を可能とする。その反面、方形に組んだ玄室下部と穹窿状に組んだ玄室上部を組み合わせる構造は、下部では半独立的に存在する壁面を、上部における持ち送りで連関させて組み上げねばならない。言うなれば、立方体と半球体を組み合わせた構造であり、より複雑な構造認識がもとめられる。この構造認

識には、素材となる石材や土量の積算等も内包される。また、有明海沿岸では古墳時代前期より石棺埋葬が定着していたことから、肥

後型石室とは別個に、「石棺に横口を取り付ける方向性（横口式石棺）」も発現した（藏富士一九九七・一九九九）。横口式石棺の構造認識は、既存の石棺の構造認識に出入口を附加したものと言える。構造認識が単純である反面、玄室空間の拡大には制限があり、使用

石材の規模や強度に応じた安全性の担保という前提条件がある。この横口式石棺を基点に玄室空間の拡大に対応した埋葬施設が石棺式石室であり、筆者は古墳構築技術の範型の一つとして「宇土型」と把握する（第3図）（小嶋二〇一五）。

【宇土型】

石材・凝灰岩・安山岩を基本石材とする。古相や上位階層墓においては、切石石材や面取り加工が多用される。石材加工や面取りを行った場所の痕跡は確認されていないが、粗割り工程を除けば、整形工程は古墳築造地点に搬入した後になされた可能性が高い。

墓坑・墓坑掘削に先行して地山整形により平坦面を確保する事例（椿原古墳）が確認されている。墓坑の掘削深度は浅く、深く

ても基底石（腰石）以下である。

作業制限・基底石を据える程度の浅い墓坑のため、全方位から石

材の搬入が可能だが、より段差が小さい、斜面下方からの搬入が有力視できる。壁面上部では裏込め盛土上での作業が基本となる。

袖部・割り貫き玄門を用いる。一枚岩を「口」字状に割り貫く場合と、一枚岩を「L」字状や「コ」字状に加工して組み合わせ

る場合の3種がある。使用石材は切石加工が容易な凝灰岩を用いる。

持ち送り・基底石（腰石）を設置する際に傾斜をつけて設置する。

腰石上面から、小型切石・扁平石材で持ち送り角度を大きくし、穹窿状天井を取り込むが、天井高を高く設計しないため天井面積が広い。

天井石の搬入・腰石や上部壁面の外側に積んだ裏込め盛土上を引き上げる。肥後型に比べると天井石が大きくなる傾向にある。

また、天井石を成形し、表面加工する事例（宇賀岳古墳・江田穴観音古墳）が確認できる。

墳丘盛土・墳丘拡張型盛土により、石室・裏込め盛土を覆うように盛土を行う。椿原古墳では、墳丘外端に墳丘外装を兼ねた土砂流出防止用の石列が確認されている。石列以外にも土塊列を利用した可能性がある。

宇土型と組み合う石室空間設計は、单室短羨道石室I類と複室石室II類が確認できる。主体となるのは、宇土半島周辺に展開する单室短羨道石室I類で、菊池川流域でのみ複室石室II類が見られる（小森二〇一一）。

（五）八代型の古墳構築技術と石室空間設計

火国（肥後国の領域）の横穴式石室では、古墳時代中期より穹窿状天井が主体的に用いられてきたが、古墳時代後期後半に新たに四壁均等持ち送り天井が出現する。この新たな天井構造は、他地域からの技術移動でもたらされたと判断でき、その祖型として紀伊の横穴式石室（岩橋型横穴式石室）が挙げられている（藏富士二〇一九・古城二〇一二a）。一方で切石石材や「コ」の字形屍床

配置等の在来要素を複合することから、筆者は「八代型」という範型で把握している（第3図）。

【八代型】

石材・凝灰岩を基本石材とする。切石石材や面取り加工が多用されており、肥後型の井寺古墳等でも見られる「L」字形加工・積み上げが見られる。石材加工は古墳築造地点でなされたと考えられ、端材は大野窟古墳の床面・墓道に敷かれた不整形石材等に転用された可能性が高い。

墓坑・墓坑の調査事例はないが、旧地表面との対応関係から基底石（腰石）を据える程度の掘削深度と見られる。

作業制限・基底石の据え付けは墓坑内で実施し、壁面上部では裏込め盛土上で石積み作業を行う。裏込め盛土量も多いと見られるが、壁面上部の作業空間は限られていただろう。

袖部・立柱石を用いる他、大野窟古墳では刳り貫き玄門・二重玄門を併用する。

持ち送り・基底石（腰石）に傾斜をつけて設置する。大野窟古墳では基底石上に石棚を設置する。基底石より上部は、腰石上面のやや後背より扁平切石石材を積み上げる。持ち送り角度は基底石よりも大きくなるが、比較的近似する。壁面石積みの中間で墳丘盛土と連動する作業休止が想定されている。肥後型との最大の違いは、隅消しとなる力石の用石がない点にあり、玄室床面から天井まで四隅に縦目地が走る。「四壁均等持ち送り」のため、玄室平面形が長方形となる八代型では、天井平面形も相似形の長方形となる。また、壁面の積み上げに際しては「L」字状の切り込み加工がなされており、壁面積み上げと併行して

石材加工を行う状況が確実視できる。

天井石の搬入・壁面の外側に積んだ裏込め盛土上を引き上げる。

厚みは不明だが、天井は一枚岩であるため、大型石材を引き上げていることが確実視できる。加えて、玄室高が極めて高いため、天井石架構時の作業空間も限られていただろう。

墳丘盛土・玄室高が極めて高い石室を覆う、高大化した墳丘を築くため、墳丘拡張型盛土が確実視できる。土砂の流出を防ぐための土塊列・石列等の利用が推測できる。

八代型と組み合う石室空間設計は、単室長羨道石室I類から派生した複室石室II類が確認できる。大野窟古墳に後続すると見られる今城大塚古墳は、石室床面の状況が不明であるが、羨道側壁に立柱石が見られないことから单室長羨道石室I・II類の可能性もある。

（六）八代海型の古墳構築技術と石室空間設計

八代海沿岸域、とくに龍峯山山麓には、「鬼の岩屋式石室」と呼ばれる終末期古墳が展開する（古城二〇一二-b）。大型板状石材のみで壁面・天井を構成するため、古墳時代後期以前に主流であった穹窿状天井を用いない。鬼の岩屋式石室の石材には安山岩が用いられるが、龍峯山山麓には露頭がなく、その有力産地として八代海南端に位置する長島が有力産地とされる（古城二〇一二-b）。日本各地に「鬼の岩屋」という同一名称の古墳が存在する点と、八代海の石材輸送を前提に古墳構築が成立する点を加味して、古墳構築技術の範型名称としては「八代海型」と呼ぶ（第3図）。

【八代海型】

石材・安山岩を基本石材とする。大きさを揃えた大型板材を用いることから、転石だけでなく母岩からの切り出しも想定されて

いる。石室構造が単純なため、各壁面に用いる石材の規模・数量を正確に算出できることから、必要な石材のみを輸送することができたと見られる。このような必要石材の算出・輸送労力の削減により、左右対称形の壁面構成が発現する。

墓坑…墓坑は浅く、各壁面石材を据える程度の深度である。緩斜面に立地する古墳が多く、斜面上方では墓坑が深くなる。

作業制限…墓坑が浅いため全方位からの作業が可能である。奥壁を優先して設置し、奥壁を挟み込む形で側壁を据え付ける。各壁面が完成した後に独立立柱石を据える。天井石の据え付けは壁面外側の裏込め盛土上でなされる。

袖部…玄室・前室とともに独立立柱石を用いる。独立立柱石のみが失われる事例が多数見られるため、力学的に眉石・天井石の負荷があまりかかつておらず、区画施設としての正確が強い。

持ち送り…基底石（腰石）に傾斜をつけて設置する。大型板状石材の隙間を充填する小型石材も、基底石の傾斜に準じる。

天井石の搬入…壁面の外側に積んだ裏込め盛土上を引き上げる。

墳丘規模と天井石の大きさを踏まえると、据え付け作業の空間は狭い。天井構造は「中高式」と呼ばれるものであり、玄室奥壁側天井石と玄門天井石を据えた後に、玄室前室側の天井石を据える手順となる。このため、玄室奥壁側・玄門天井石を据えた段階で側壁基底石上に小型石材を積み上げることになり、天井石架構と壁面積み上げ・裏込め盛土が連動してなされる。

墳丘盛土…墳丘拡張型盛土と見られるが、石室を露出する古墳が多く、盛土の流出が著しい。土留等の処理が簡略であつた可能性がある。

八代海型と組み合う石室空間設計は、複室石室I類のみと見られる。玄室・前室の区画は、独立立柱石によりなされ、天井・側壁には区画施設をもたない。

(七) 肥後における古墳構築技術の系統関係と特色

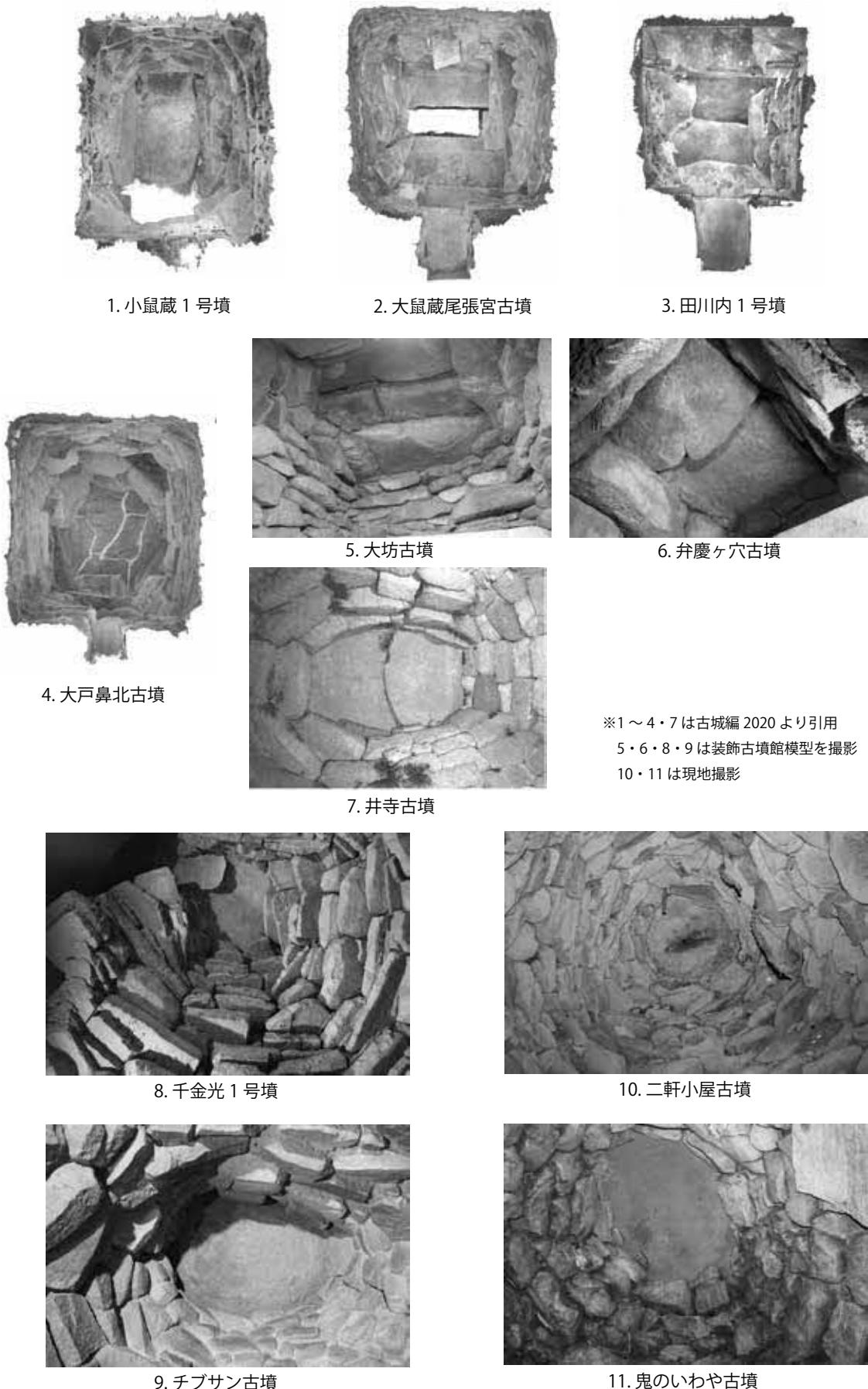
鞠智城が築かれた肥後国の範囲内での古墳構築技術について、「肥後型（肥後中期型・肥後期型）」・「宇土型」・「八代型」・「八代海型」の四つの範型を見出した。他に他地域起源の範型としては、少数の北部九州型・筑肥型・筑紫型が存在する。これらの範型は、石室と墳丘の双方を統合した古墳構築を志向したものだが、熊本県域の横穴式石室墳は装飾古墳に該当する場合が多く、墳丘の発掘調査事例が少ないと、情報蓄積が不十分である。現状では石室の情報に比重を置かざるを得ないため、以下では「○○型石室（○○型横穴式石室）」と呼称する。

上記の四範型に関する系統関係、および石積み技術の特色を探る上では、①天井構造・②腰石技法・③袖石技法の整理が重要である。

①肥後型石室の天井構造

肥後の初期横穴式石室墳の多くが、石障系横穴式石室（狭義の肥後型横穴式石室）と呼ばれるように、玄室規模・形状は石障と連動する（河野一九八二）。このため石室下部は立方体構造となるが、石室上部については意匠的属性も含めて本質的には自由設計となる。九州北部では堅穴式石室に見られる合掌形天井の技術を応用したが、肥後では百濟地域の横穴式石室墳の系譜に連なる穹窿状天井を踏襲した。ただし、八代海周辺の初期肥後型石室（小鼠藏一号墳・大鼠藏尾張宮古墳等）の穹窿状天井では天井石の架構に癖があり、大型板状石材を階段状に積み上げて天井を塞ぐ（第4図）。こ

半階段積み架構



※1～4・7は古城編2020より引用
5・6・8・9は装飾古墳館模型を撮影
10・11は現地撮影

円錐積み架構

第4図 肥後型石室天井の半階段積み架構と円錐積み架構（画像縮尺不同）

の大型板状石材の半階段積み架構により、天井高をそれほど高めず、天井面積が広い段階で天井石を架構することができる。この相対的に「天井高が低い」・「天井面積が広い」という特徴は長期的に受け継がれ、八代海沿岸と菊池川流域で系列を形成する（第3図）。

上記の半階段積み架構の肥後型石室とは異なり、より百濟型石室の穹窿状天井の特徴を残す円錐積み架構の肥後型石室が肥後中央の宇土半島基部から緑川・白川流域にかけて系列的に見られる（第3・4図）。その代表例が千金甲古墳群で、八代海沿岸の石障系横穴式石室に比べて、相対的に「天井高が高い」・「天井面積が狭い」という特徴をもつ。天井高を高め、天井面積を狭くすることで、精美な穹窿状天井と天井石の小型化を実現した。また、緑川流域の井寺古墳は切り石積みで著名だが、天井石の精緻な加工からも明らかなるように天井構造の設計は場当たり的なものではないことが確実視できる。

このように肥後型横穴式石室内部には、大別して二種類の天井石架構方法（円錐積み架構・半階段積み架構）が存在する。これらは穹窿状天井という同一原理内での相対評価であり、大戸鼻北古墳のように半階段積み架構に属するが、天井面積が広い円錐形になる事例も含む。また、現状の資料を時系列で整理すると、穹窿状天井の完成度が高く、百濟型石室とより共通する円錐積み架構の方が、半階段積み架構よりも後出する。玄界灘沿岸域の糸島型・宗像型石室や九州北部に面的に広がる片袖気味の石室、墳丘高大化、墳丘表飾の検討結果では、古墳時代中期前半の初期横穴式石室の導入に次いで、古墳時代中期後半（後期前半）にかけて、朝鮮半島との双方向的な技術交流がうかがえる（小嶋二〇一七b・二〇一八c）。肥後型

石室でも、国内外の外来要素の導入が複数回及んでいると見た方がよいだろう。

②肥後型・八代型・宇土型・八代海型石室の腰石技法

肥後における腰石技法は、「宇土半島基部以南の地域にみられるよう¹⁰に玄室三壁に腰石が採用される場合」と「菊池川流域・白川下流域に見られるような側壁側から腰石が採用される場合」の二通りが存在し、前者は石障を玄室三壁に取り込んだもの、後者は屍床を玄室側壁に取り込んだものとして整理されている（池田一九八二・藏富士一九九九）。筆者はこの二系統に加え、横口式石棺の壁体を玄室壁面に取り込んだ別個の系統を認め、「石障系腰石」・「屍床系腰石」・「石棺系腰石」の三系統で理解する（第5図）。この腰石技法三系統を古墳構築技術の範型で整理すると、石障系腰石は肥後型石室（緑川系列・天草系列）・八代型石室、屍床系腰石は肥後型石室（白川系列・菊池川系列）、石棺系腰石は宇土型石室・八代海型石室に概ね該当する。ただし、各範型・系列は独立して存在するのではなく、相互に融合を繰り返す関係にある。一例を挙げれば、宇土半島で出現した石棺系腰石技法は有明海航路を通じて北上し、菊池川流域の肥後型石室の石障系腰石技法とも融合する（第3図）。

③肥後型・八代型・宇土型・八代海型石室の袖石技法

肥後における袖石技法にも、腰石技法と同様に系統差を見出すことができ、「玄門平積み」・「立柱石」・「玄門化粧板石」・「屍床系袖石」・「石棺系袖石」の五系統で整理できる（第5図）。玄門平積みは、祖型となる百濟型石室で見られる他、初期の北部九州型石室の石積みとも共通するもので、初期の肥後型石室（八代海系列）で確認できる。立柱石は北部九州型石室と共に袖石技法で、出現期の複室をも



1. 小田良古墳の石障と裏込め盛土上の壁面石積み

石室壁面の構築に先行して、石障を設置する。石障の設置は広めの墓坑を掘削してなされた。このため、壁面石積みは地山ではなく、石障の裏込め盛土上でなされる。



2. 大松道古墳の石障系腰石と壁面石積み

石障系腰石上の石積みは、地山ではなく、腰石背面の裏込め盛土上でなされる。壁面の負荷が垂直方向だけでなく、石室内側にも向かうため、腰石が不自然に破損・内傾する。



3. 井寺古墳の玄門平積みと石障と化粧板石

玄門平積みを覆い隠すように、開口部側と通路側に化粧板石を配する。石障と同様に化粧板石にも直狐文や彩色を施す。



5. 二軒小屋古墳の屍床系袖石・腰石

屍床の区画石を前壁・側壁に取り込んだ石室。前壁下部では眉石を支える袖石（屍床系袖石）として機能する。側壁の屍床は前壁は壁面に取り込まれるもの、石屋形側では半独立的に存在する。

※1・3・4 は装飾古墳館模型、2・5 は現地撮影



4. チブサン古墳の屍床と屍床系袖石

玄室側の袖石が石障の直系とも言える屍床の一部材を兼ねる。袖石は力学的に眉石と無関係で、区画施設としてのみ機能する。左袖は二重袖石となり、二重玄門が石障から連なる意匠的系譜にあることを示唆する。

第5図 肥後型石室の袖石技法と腰石技法（画像縮尺不同）

つ肥後型石室（菊池川系列）で見られる。玄門化粧板石は、玄門平積みの壁面に沿って板状化粧板石を配したものである。井寺古墳では石障と同様の直狐文を刻み、両者が有機的に結び付いていることが分かる。この玄門化粧板石は、平壌の南井里一一九号墓でも確認されており、両者の関係が注目される（重藤二一〇二一〇）。屍床系袖石は石障・屍床の前区画を前壁に取り込んだもので、上述の屍床系腰石と同一構造で理解できる。肥後型石室（白川系列）の二軒小屋古墳やチブサン古墳が典型例で、柱状石材ではなく、扁平な板状石材を袖石に配する。石棺系袖石も上述の石棺系腰石と同一構造で理解でき、横口式石棺前壁を石室前壁に取り込んだものである。大別して、刳り貫き玄門と独立立柱石の二系統がある。石棺前壁が側壁から半独立的に存在している特徴を受け継ぎ、石棺系袖石は側壁からの独立傾向が強い。刳り貫き玄門は宇土半島・八代海周辺に広がる。独立立柱石は石棺式石室の広がりとともに、八代海・有明海・東シナ海、日本海沿岸（山陰基点）の広域に分布する（小嶋二〇一五・小松一九九九・古城二〇一二b）。独立立柱石をもつ八代海型石室もその系譜を受け継ぐ石室群と言えよう。

なお、肥後では二重玄門となる石室が複数見られるが、その内実は屍床系袖石から展開したもの（肥後北部）や石棺系袖石から展開したもの（肥後南部）を内包する。

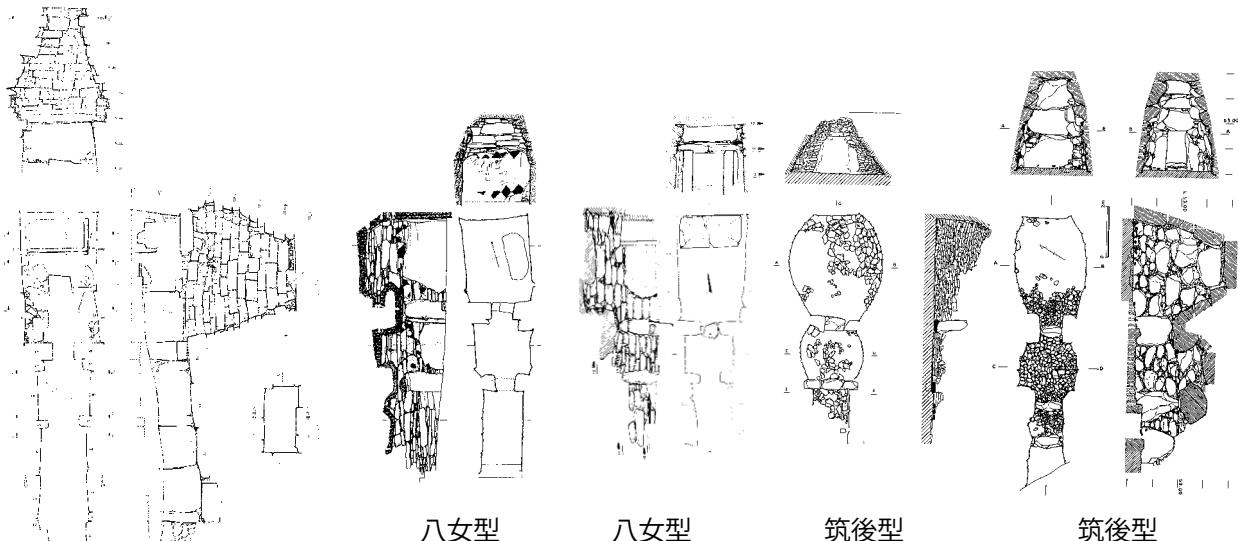
（八）火国における古墳構築技術と石室空間設計の様相

古墳構築技術の範型と石室空間設計の組み合わせから、火国内外の人的結合関係を探る（第6図）。まず、鞠智城が所在する肥後北部・菊池川流域は、古墳時代中期後半から肥後型石室（半階段積み架構）と複室石室I・II類が飛鳥時代まで系列をなす。天井石架構

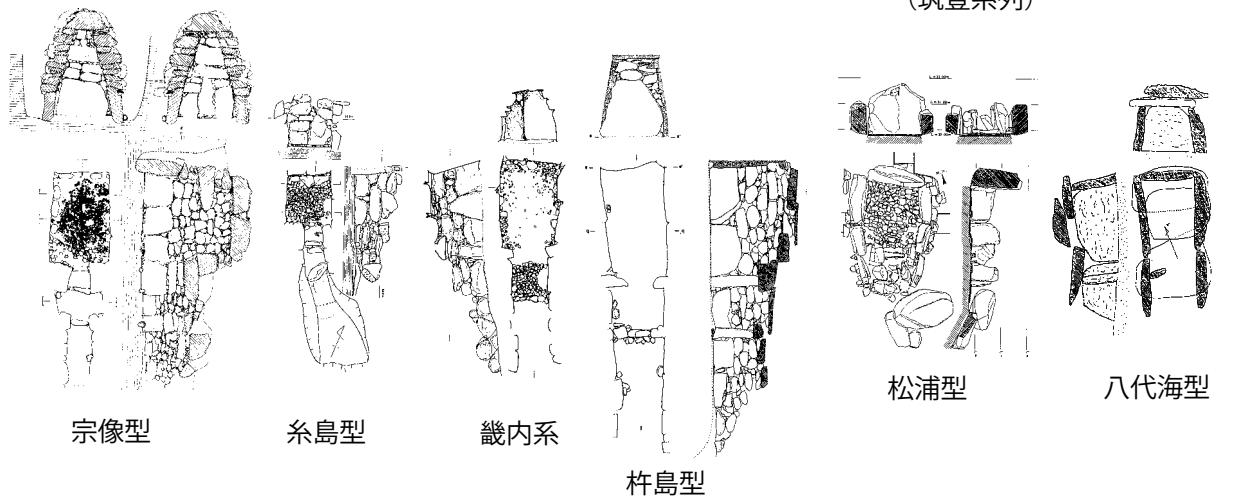
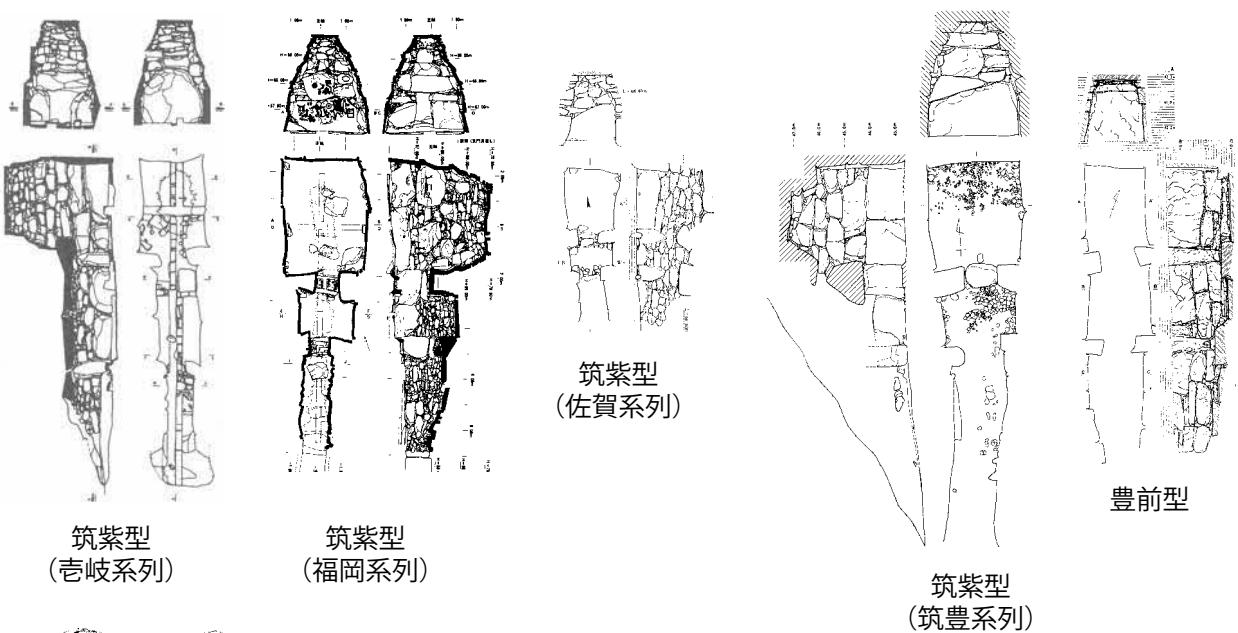
や石障の存在から、古墳時代中期前半に成立した肥後型八代海系列から派生したものと見てよい。新出要素としては、各地に玉突き状に広がる前室の創出や、室空間の仕切りを兼ねる立柱石・二重玄門、彩色壁画、石屋形がある。古墳時代後期後半には、再度、有明海南端で成立した宇土型横穴式石室が波及し、肥後南部系列とは異なる肥後北部系列を形成する。この宇土型肥後北部系列は、既存の肥後型菊池川系列と同時併存しており、相互の要素を融合する関係にある。また、鞠智城近辺の菊池川中流域では、天草周辺の横穴式石室と類似する单室短羨道石室I類の肥後型石室が見られる。以上のように菊池川流域は強い独自性を発現しつつも、その技術的基盤は九州北部・有明海南端・八代海周辺の古墳構築技術より断続的に影響を受けていることが分かる。このような環有明海沿岸域の協力関係は、古墳時代中期の石製表飾・横口式石棺の広がりとも共通する。

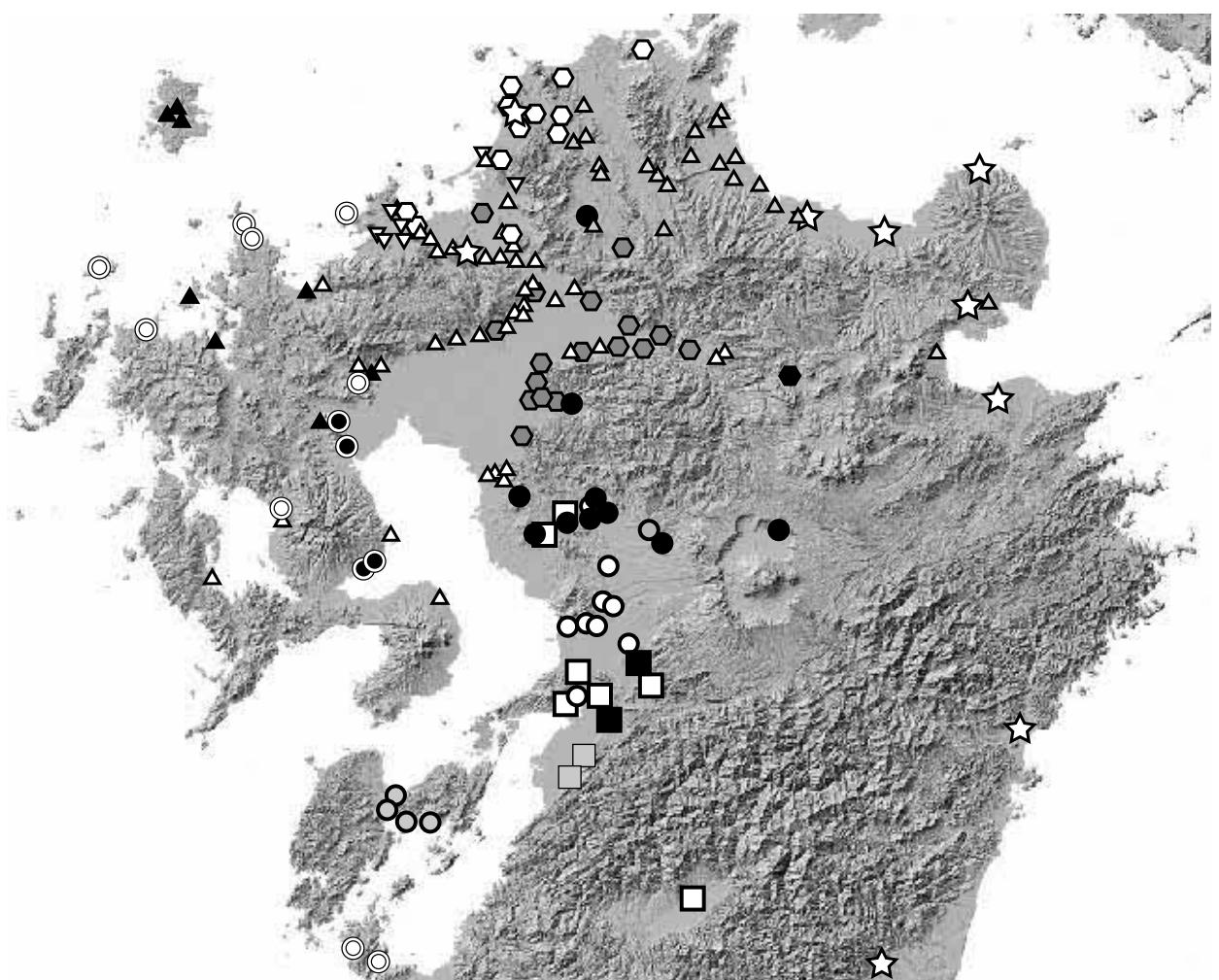
次に菊池川流域以北の様相を探る。諏訪川流域（後の筑後国三毛郡域・福岡県大牟田市周辺）は古墳時代中期には菊池川下流域から連綿と石棺が運ばれ、両者に強い紐帶関係が存在する。しかし、古墳時代後期後半の古墳構築技術を見ると、背振山系山麓に展開する筑紫型が主流範型となり、有明海北端側との人的結合がうかがえ、肥後側から離脱傾向にある。さらに北側の南筑平野中央部では、八女丘陵を中心に筑後型・八女型という異なる古墳構築技術が展開する。ただし、筑後型・八女型はともに、石室空間設計を含め肥後型菊池川系列の強い影響下にあり、八女丘陵周辺と菊池川流域では確実に造墓動員の重複がうかがえる。

肥後中央部の白川・緑川流域では、肥後型石室のうち、天井石架構に円錐積みを用いる白川系列・緑川系列が展開する。両系列は古

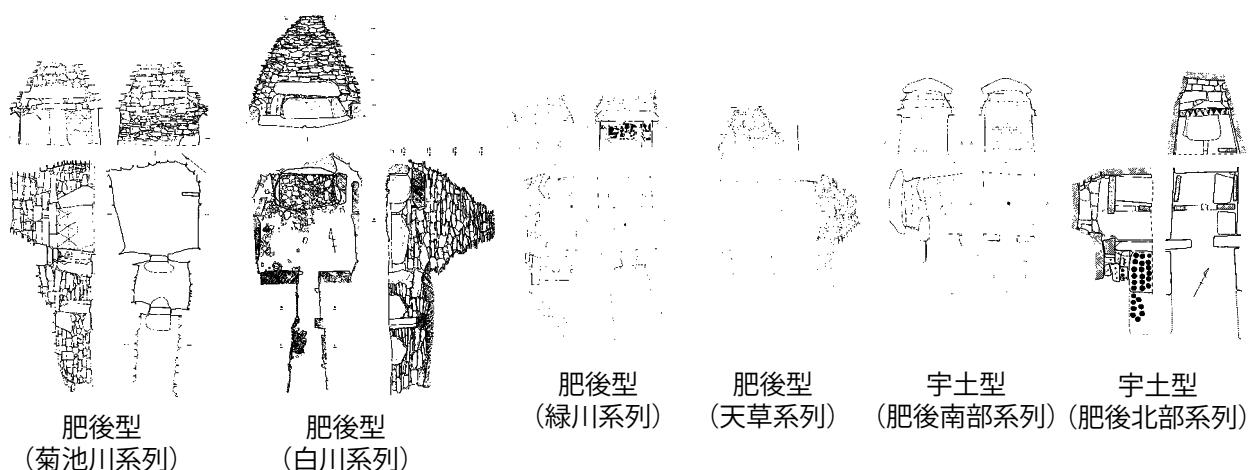


八代型





- | | | |
|-------------------|---------------------------|-------------|
| ● : 肥後型 (菊池川系列) | △ : 筑紫型 (福岡・佐賀系列) | ◎ : 八女型・筑後型 |
| ○ : 肥後型 (白川・緑川系列) | ▲ : 筑紫型 (壹岐系列) | ◇ : 宗像型 |
| ○ : 肥後型 (天草系列) | △ : 筑紫型 (筑豊系列)・豊前型 | ▽ : 糸島型 |
| □ : 宇土型 | ☆ : 穴内系 | |
| ■ : 八代型 | ● : 杵島型 | |
| ■ : 八代海型 | ○ : 二重壁石・独立立柱石室群 (松浦型他含む) | |



第6図 6-7世紀の横穴式石室墳の様相 (石室 S=1/300)

墳時代中期前半に成立した八代海系列の直系にあたるが、天井石架構方法の型式差が大きく、「朝鮮半島からの第二波及」を内包する

と見られる。緑川以南では井寺古墳で壁面の切石積みが採用され、宇土半島・八代海沿岸域へと同一系列の肥後型石室が展開する。この肥後型緑川系列を基に、八代型石室が成立する。石室空間設計は白川系列が单室短羨道石室I類から複室石室I類に変遷、緑川系列では单室短羨道石室I類が確認できる。上流部（阿蘇地域）の上御倉古墳・下御倉古墳は、肥後北部の菊池川系列の要素が強い石室（複室石室II類）である。

肥後南部は肥後型石室の成立地域であり、古墳時代中期には百濟型・北部九州型・地下式板石積石墓の三者の要素を融合した肥後型八代海系列が展開する（宇野二〇一二）。古墳時代後期前半の良好な資料に恵まれないが、緑川系列に属する国越古墳（切石積みの肥後型石室）が上位階層墓での基軸となる。古墳時代後期後半には、最上位階層墓で八代型、宇土半島周辺で宇土型、天草周辺で肥後型天草系列が展開する。肥後型天草系列は天井石架構が円錐積みで、緑川・白川系列と共に通する。石室空間設計は肥後型八代海系列・緑川系列、宇土型肥後南部系列と共に通する单室短羨道石室I類で平面形も類似する。宇土型石室は宇土半島基部を中心に行開するが、遠隔地（南限）の事例として球磨川上流域の鬼の釜古墳が挙げられる。飛鳥時代の終末期古墳としては、八代海型石室が八代海の南北航路を前提に展開する（古城二〇一二b）。

以上のような横穴式石室墳の様相は、横穴墓の動向から見える地理的区分とも概ね類似しており、横穴式石室墳と横穴墓の総合的研究・相互検証により堅実な研究成果が期待できる（宇野二〇一一・

高木二〇一九）。

最後に有明海を挟んだ火国・肥前国の概要を述べる。同地域では、古墳時代中期～後期前半にかけて、佐賀平野中央部（肥前国佐嘉郡）では舟形石棺・横口式石棺・石製表飾、唐津湾沿岸では石障系石室が分布しており、肥後とのつながりがうかがえる。ただし、主たる古墳構築技術は、西彼杵半島等の肥前国西部の非古墳文化地域の除くと、全域で北部九州型が主体となる（小松一九九九・宮崎二〇一九・蒲原二〇一九）。古墳時代後期後半では、背振山地南麓の佐賀平野において群集墳造営が活発化し、ひろく筑紫型（佐賀系列）が分布する。佐賀平野東端・筑後川北岸では筑後型が一部分布するが、数量的には筑紫型が圧倒する。これに対し、佐賀平野西端では、松浦回廊（松浦川・牛津川流域）を中心に玄門袖部平積みの横穴式石室が見られ、玄界灘沿岸域（糸島型石室）とのつながりがうかがえる（小松一九九五・小嶋二〇一八c）。また、壱岐島・唐津湾沿岸・松浦回廊（松浦川・牛津川流域）・有明海西部・肥後南部は複室石室I類（藏富士分類の西北九州系石室）・線刻壁画が帶状に分布しており、本航路・陸路が頻繁に利用されていたと判断できる（藏富士二〇一一・角二〇二一〇・西山一九九七）。また、独立袖石や二重側壁をもつ横穴式石室墳（杵島型・松浦型）が、有明海西部・松浦回廊・唐津湾沿岸にやはり帶状に分布する（小松一九九九）。

（九）小結

本節では、古墳構築技術と石室空間設計から火国の領域を探った。古墳時代後期以降の火国は有明海北西側の肥前領域（佐賀県・長崎県）と、有明海南東側の肥後領域（熊本県）で主たる古墳構築技術

の範型が異なり、肥前領域は筑紫型（壱岐系列・佐賀系列）・杵島型・

松浦型、肥後領域は肥後型・宇土型・八代型・八代海型が基本組成

となる（第6図）。肥後領域に石材加工が容易な凝灰岩を産出する地質特性を考慮しても、壁面石積みや天井石架構の状況をふまれば、肥前・肥後の両者でそれぞれ独立した造営主体（豪族）が存在したと判断できる。ただし、肥前と肥後が没交渉な存在であつたわけではなく、壱岐島・松浦回廊（松浦川・牛津川流域）・肥後南部を中心に、单室長羨道石室・複室石室Ⅰ類という石室空間設計や線刻壁画の共有が認められ、血縁関係を含む両者の長期的かつ継続的な人的結合がうかがえる。

次に火国と筑紫国の境界を整理すると、玄界灘沿岸では火国の唐津湾沿岸が筑紫型（壱岐系列・佐賀系列）・松浦型、筑紫国の糸島半島が糸島型・宗像型という組成となり、後の肥前国と筑前国の境で明確に分かれる。有明海北側では筑後川北岸の背振山地南麓が筑紫型（佐賀系列）、筑後川南岸の耳納山麓が筑後型・八女型という組成で、後の肥前国と筑後国で分かれる。有明海東側では矢部川流域が筑後型・八女型、諏訪川流域が筑紫型、菊池川流域が肥後型・宇土型という組成となる。後に矢部川・諏訪川流域が筑後国、菊池川流域が肥後国となるが、やはり古墳構築技術の分布と令制国の範囲が対応する現象が認められる。

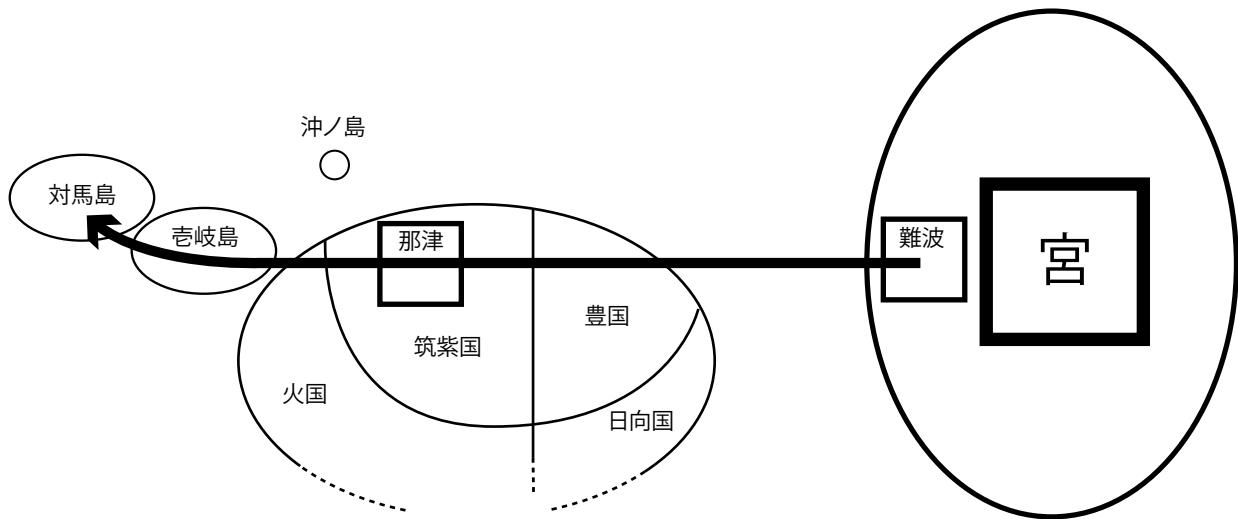
以上の現象を鑑みると、令制国の領域は、単に地理的区别で機械的に設定されたのではなく、むしろ古墳時代に形成された地域秩序（各豪族を軸とする人的結合）を取り込む形で設定されていると判断できる。ただし、古墳時代後期の豪族間の人的結合には、国造制や部民制、ミヤケの設置といった倭政権・中央氏族の動向という要素も複合する。

三、火国と鞠智城

（一）「海西」概念から見た火国の領域

上記では古墳構築技術の様相から、鞠智城築造期における火国の領域が、古墳時代に形成された地域秩序を取り込む形で設定されたことを論証した。ここでは日本列島という俯瞰的な視点から火国の領域を検討する。

後の令制国に取り込まれる地域秩序は、歴史的に形成されてきたものだが、その画期となつたのは六世紀（古墳時代後期）である。六世紀は中央集権化への胎動期にあたり、近年、倭政権の地理的認識の転換期としても注目されている。森公章氏は『日本書紀』等の表記における「海北」から「海西」の概念を検討した（森二〇一九）。その成果を要約すると、海北という表記は「倭王権が北部九州を拠点に、あるいは九州の豪族の軍事的活動に依拠して朝鮮半島との通交に臨まざるを得ない時代相を反映したもの」であり、海西という表記は「（倭王権が）難波を拠点とする吉士集団、難波館という迎客施設などによる国家的外交機構を整備し、難波・児島屯倉・筑紫の那津官家を結ぶ瀬戸内海交通、中国・朝鮮半島への大動脈を独占していく」ことで成立したと整理できる。この海西概念に当たはめれば、火国は「筑紫の那津官家へと至る瀬戸内海交通、中国・朝鮮半島への大動脈」の外縁に位置しており、「筑紫國の外側」にある範囲を、すべて「火国」とする領域觀がうかがえる（第7図）。火国は肥後のようないくつかの「古墳文化地域」だけでなく、西彼杵半島や五島列島を中心とする「非古墳文化地域」も内包しており、



第7図 倭政権中枢から眺めた筑紫(6~7世紀)

多様な地域実態をもつ(宮崎二〇一九)。同一構造の領域觀は、九州島東部の豊國と日向国の関係にも該当し、瀬戸内海交通(東西航路)の要衝・豊国の外側はすべて日向国と認識される。日向国の範囲は、律令制下で「隼人」と政治的に設定される人々が居住した南九州全域(後の薩摩国・大隅国)に及び、六・七世紀における「非古墳文化地域」を内包する(橋本二〇二〇)。このように、六世紀から中央集権化の過程で醸成されてきた倭政権の領域觀(西日本)は、「難波・瀬戸内海・豊・筑紫・

壱岐・対馬・朝鮮半島南岸」という大動脈を基点にしており、その領域觀は戦時侵攻体制や戦時防衛体制、すなわち古代山城の分布とも完全に一致する(第2図)。

(二) 筑紫国・火国における軍事動員の歴史と鞠智城

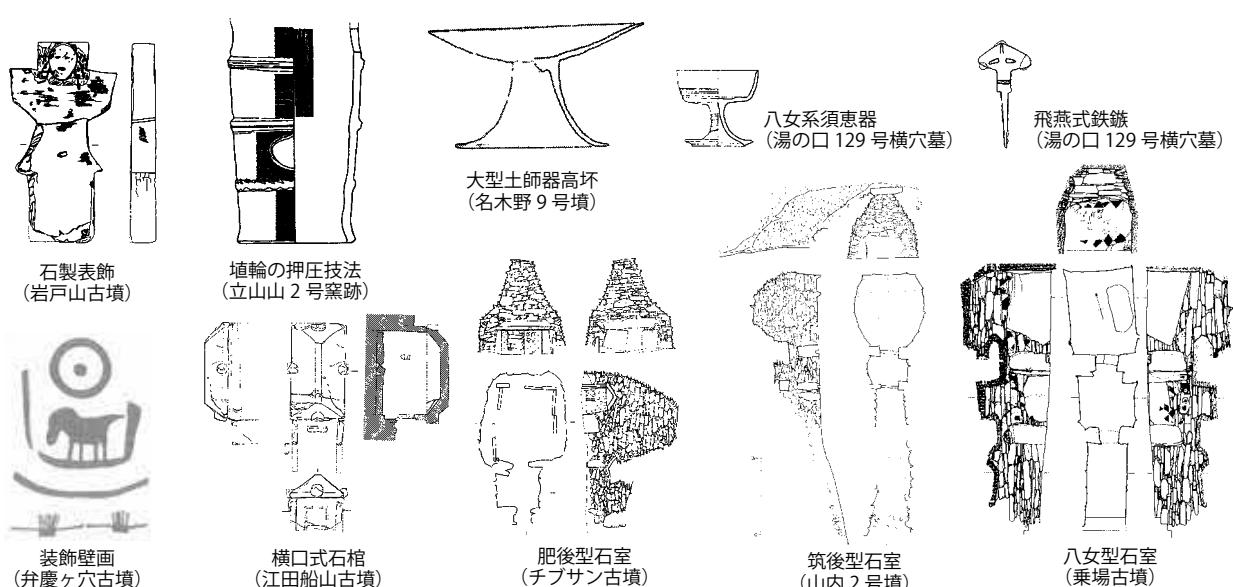
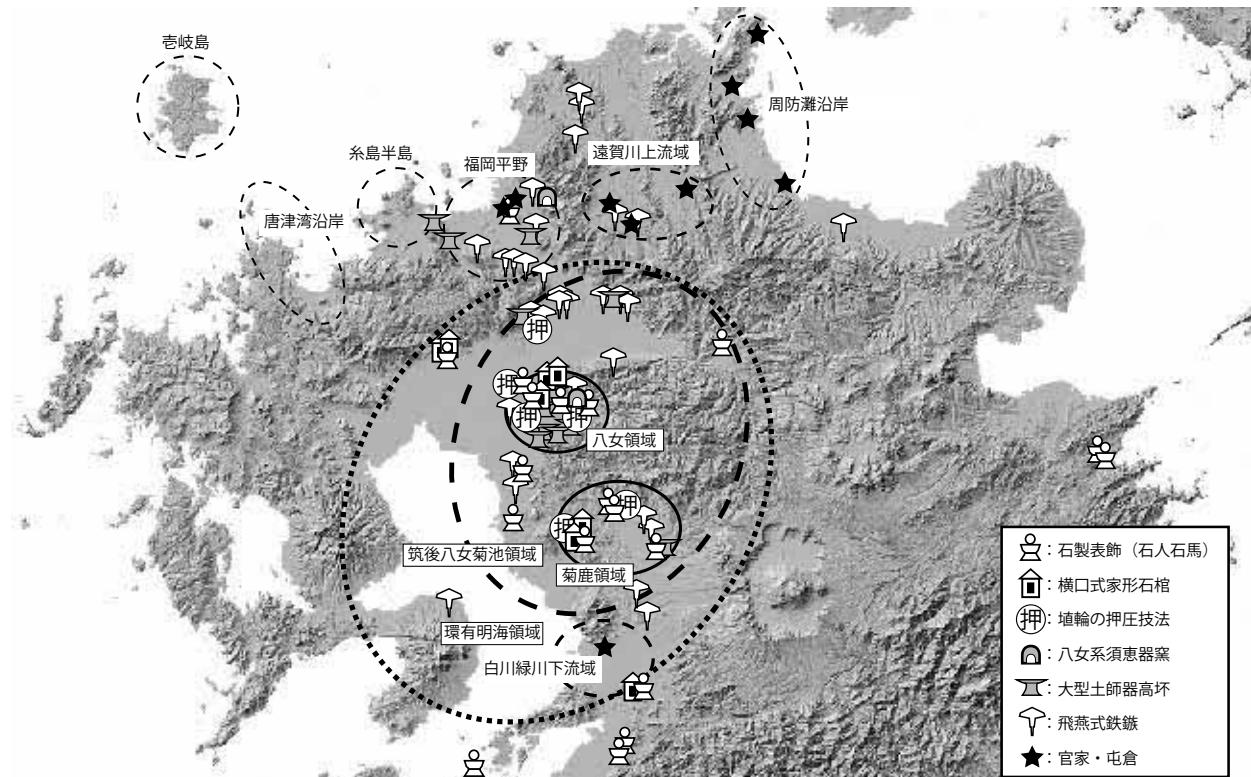
火国の領域設定をふまえた上で、「難波・瀬戸内海・豊・筑紫・壱岐・対馬・朝鮮半島南岸」の最外縁に位置する古代山城・鞠智城の役割を追究する。すでに天智紀の戦略で述べたように、古代山城を機能させる動員体系は評造軍であった。すなわち、筑造期の鞠智城の役割を明らかにするには、菊鹿盆地の評造軍、その歴史的形成過程にも目を向けなければならない。

菊池川流域の豪族は、江田船山古墳出土象嵌大刀の銘文「典曹人」からうかがえるように、五世紀後半には倭政権の構成員となっている。ただし、国造軍への編成がはじまるのは、筑紫・火・豊を巻き込んだ「筑紫君磐井の乱(五一七・五一八年)」以降である。この筑紫君磐井がどのような動員体系・範囲をもつっていたのかを、大型古墳の動員体系(古墳構築技術の範型・墳丘表飾の系統関係)から検証すると、筑紫君が直接動員できる主たる範囲は筑後川下流域から矢部川流域にかけての「八女領域(八女型・筑後型のI・II領域)」と言わざるを得ない(第8図)(小嶋二〇一三・二〇二〇a)。つまり、筑紫・火・豊という広域での反乱(戦争)には、筑紫君磐井と同調する豪族の存在が不可欠であり、他の豪族の命令系統に基づく間接動員(筑紫連合・有明海連合と称される協力関係)により

成立する（小田二一〇〇七・甲元二一〇一九b・柳沢二〇一四）。考古資料に基づいて、間接動員の範囲を検証すれば、その筆頭に挙げられるのが菊鹿盆地である（第8図）・（註7）。菊池川流域における古墳時代から古代にかけての交通路を体系的に整理した高木恭二氏の研究に基づくと、後の延喜式西海道本路と車路本路が両地域をつなぐ物流路として機能している（高木二〇一二）。この南北の物流路を八女地域側から検討すると、八女丘陵中央を縦断する「藤山道」との接続が注目できる。この藤山道は岩戸山古墳の近傍を縦貫し、両者の有機的なつながりが認められる。八女古墳群はおおよそ西から東へ造墓域が移動することが指摘されてきたが、筆者はその契機となつたのは藤山道の拡充と八女丘陵中央裾部の開拓（水路掘削による耕作地の拡大）・山林開発であつたと考える（第9図）。岩戸山古墳をはじめとする八女西群の築造自体（物資搬入路の整備等）も、藤山道拡充の一助となつただろう。すなわち、筑紫君磐井が台頭する基盤には、南北をつなぐ物流路の拡充があつたと考えられる（註8）。この藤山道は西海道本路開通以前の最重要縦貫道であり、本道を塞ぐために、筑後国府先行官衙・高良山古代山城と組み合う上津土墨が築かれた（註9）。上津土墨は発掘調査により、筑紫大地震の被災痕跡が見出されているため、六七九年以前の交通路として藤山道が重要視されていたことが確実である（西谷二〇一八・松村一九九四）。藤山道を北上すると、反乱の最終局地戦の舞台となる御井郡、筑後川渡河を経て三国丘陵へと至る。三国丘陵は筑前・筑後・肥前の三国の境に位置し、『筑後国風土記逸文』において筑紫君と火君等が「龜猛神」を鎮め、安全な峠越えが果たされたという伝承地であり、現在も筑紫神社が鎮座している（小嶋二〇一〇b）。

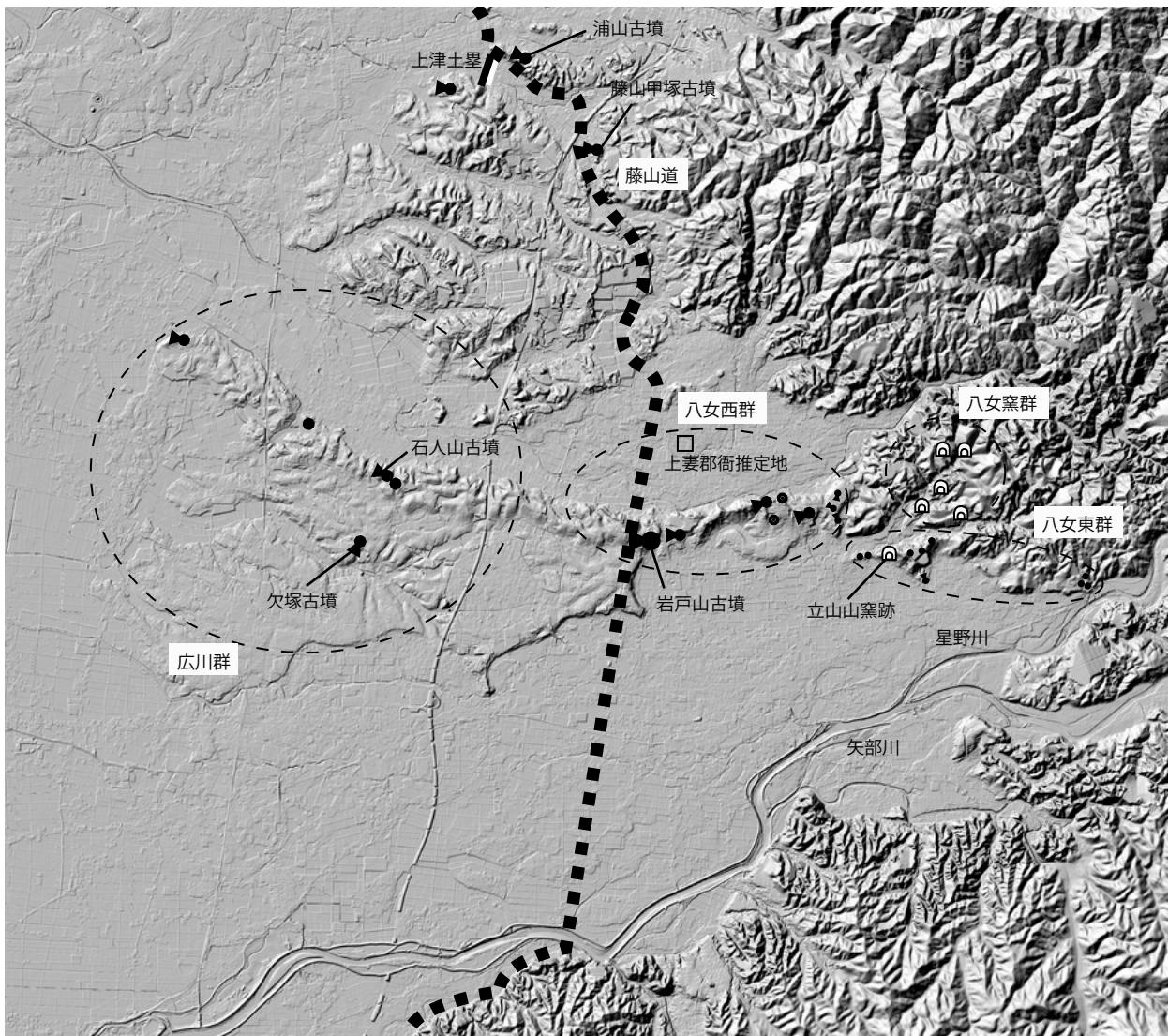
また、本道が通過する鳥栖市域（梅坂炭化米遺跡等）では六世紀前半の焼失集落が見出されており、磐井の乱との関係が注目される。磐井の乱における戦闘も縦貫道を軸に展開し、御井郡の戦いも筑後川渡河地点が主戦場になつたと考えられる。

以上のように筑紫君と縦貫道の関係は、考古資料と文献史料の双方からうかがえ、筆者は西海道本路の開通に先行する縦貫道を「筑紫縦貫道」と呼ぶ（第10図）。三国丘陵より北方の縦貫道と筑紫君の関係は不明だが、その延長線上に葛子が献上したとされる糟屋屯倉が存在することに注目したい。有明海沿岸域を拠点とする筑紫君と玄界灘沿岸域の関係については、考古資料からの検証が難しい課題であったが、近年、八女古墳群における古墳構築技術の範型が整理できたことで、那珂・比恵遺跡群（那津官家）に隣接する東光寺剣塚古墳造営、あるいは阿恵遺跡（糟屋評衙）に隣接する鶴見塚古墳造営における筑紫国造の関与をより実証的に提示できる状況になつた（津曲二〇〇四・小嶋二〇一〇）。また、他にも東光寺剣塚古墳出土の石製表飾片、若杉今里窯跡における八女系須恵器の生産、飛燕式鉄鏃の分布等の資料蓄積が着実に進んでいる（木村二〇一三・長・中島二〇一三、齊藤二〇一四・二〇一七・二〇一八、中島二〇〇九、西岡二〇〇五、柳沢二〇一四）。ただし、これらの資料はいずれも乱後の筑紫国造の活動に關係するものであり、乱前の筑紫君との関係を示す資料ではない。糟屋と磐井の関係は現状の資料を見る限り、痕跡が見出しにくい短期的なものであつたと考えられる。いずれにせよ、葛子献上の糟屋屯倉は単独で存在しているのではなく、六世紀に形成されつつあつた交通網と連結していたと見られ、筑紫国と火国を結ぶ筑紫縦貫道の拡充は筑紫君・火君等が



第8図 「筑紫君磐井の乱」に関する考古資料とミヤケ

(石製表飾 S=1/60、埴輪 S=1/12、土器 S=1/10、鉄鎌 S=1/8、石棺 S=1/200、石室 S=1/300、壁画縮尺任意)



【広川群:石人山古墳・欠塚古墳等】

古墳時代中期(5世紀)における八女古墳群の有力墓が築かれる。石人山古墳は、横口式石棺・石製表飾・墳丘規模(約120m)が環有明海沿岸域の首長墓と共通し、同地域の一首長系列墓と評価される。

広川群は、八女丘陵西端の低台地と解析谷が入り組んだ場所に散在し、本自然環境を利用した小区画水田に生業基盤があつたと考えられる。5世紀後半には八女丘陵東端の立山山窯(埴輪窯)の操業が確認でき、本格的な山林開発が着手される。

【八女東群:八女丸山古墳・童男山古墳群等】

立山山周辺は古墳時代中期～後期前半にかけて、立山山窯の操業と群集墳造営がなされる。最も低地に位置する八女丸山古墳は、岩戸山古墳築造直前の前方後円墳で、九州島でも最初期のV群系埴輪(一部、B種ヨコハケ)を樹立する。平野の最深部に築かれた童男山古墳群は、古墳時代後期後半～飛鳥時代にかけて利用された墓域であり、最新相の石製表飾を有する。

八女東群のうち西の立山山周辺は、山林伐採と群集墳造営が運動してなされた場所となる。また、八女東群の北側は小河川が流れる谷筋があり、同谷筋から水路を掘削することで、八女丘陵中央南裾の開発が可能になつただろう。八女東群の東端は星野川からの取水水路開削に適した場所であり、同地を見下ろす童男山古墳群の立地は水資源の管理と関係すると見られる。

【八女西群:岩戸山古墳・乗場古墳等】

岩戸山古墳を筆頭に大型古墳が集中する墓域。広川群・八女東群よりも後発しており、古墳時代後期以降に造墓活動を本格化する。岩戸山古墳の埴輪は立山山窯で生産されており、八女東群と接続する物資輸送路の存在が確実視できる。物資輸送路は丘陵裾の水路と並走していくだろう。

大型古墳が八女西群に集中する最大の要因は、丘陵周囲の開発とあわせて、同丘陵を南北に横断する藤山道の存在が大きいと考えられる。藤山道は西海道本路開通以前の基幹道であり、北は博多湾、南は菊池川流域に向かう。古墳時代後期(6世紀後半)には八女産須恵器の南北の流通が確認でき、藤山道が物流を支えていたことを実証する。

【八女窯群:八女古窯跡群】

立山山の山林資源枯渇後、谷筋を上るように操業された須恵器窯。古墳時代後期(6世紀後半)に操業を開始し、奈良時代(8世紀前半)まで操業が続く。同窯の製品は菊鹿盆地に大量供給され、筑後川北岸から博多湾にかけても広がる。

第9図 八女古墳群と「藤山道」



※地形を基に、①大型古墳・大規模群集墳の立地、②古墳構築技術（横穴式石室墳・埴輪）の共有関係、③須恵器の流通状況、④『日本書紀』・『風土記』記載記事を組み合わせて、古墳時代後期～飛鳥時代（白村江の戦い以前）の主要陸路を想定した。古代山城や土塁は参考までに図示している。

第10図 筑紫君・筑紫国造と筑紫縦貫道

担つていたことまでは認められる。

乱後の倭政権は国造制・部民制の展開を通じて、複数の命令系統に分断された状態（国造軍）ではあるが、九州北部の豪族を朝鮮半島での軍事活動に大量動員できる環境を整えた（酒井二〇一八）。当然ながら、主要な徵発対象となつたのは敗れた豪族達であり、筑紫君一族はその筆頭であつたと見られる。文献史料では欽明紀一五年一二月条における対新羅戦での筑紫国造の活躍、百濟の役で唐軍捕虜となつた筑紫君薩野馬が知られ、筑紫国造（筑紫君）の長期的な軍事動員がうかがえる。このような筑紫国造の軍事動員の存在を示す考古資料として注目するのが、八女地域に集中分布する初期の飛燕式鉄鎌であり、当初の所有氏族の主体は筑紫君と考える（西岡二〇〇五、斎藤二〇一四・二〇一七・二〇一八）。飛燕式鉄鎌の分布範囲は、六世紀後半（七世紀中頃にかけて筑紫縦貫道に沿うように南北（北の博多湾側に偏重）に広がる。特定古墳群に出土が集中する状況から、単なる物流ではなく、氏族間の協力関係や筑紫国造の動員を契機として広がつたと見る。この飛燕

式鉄鎌と筑紫縦貫道の相関関係をふまえると、筑紫国造の軍事動員

の過程として、本拠地である八女領域（後の上妻評）で同族集団の

軍容を整えた後、筑紫縦貫道を北上しながら国造指揮下の人々を順

次徴発することで、筑紫国造軍を集結していたと推測できる。この

ような同一指揮系統下での動員も、鉄鎌形式共有の機会となつただ

ろう。

火国での国造軍編成では、菊鹿盆地（菊鹿領域）の人々がその筆頭対象であった。すなわち、筑紫国造と命令系統を分断した上で、軍事動員の対象となつたと見られる。その痕跡の一つが、弁慶ヶ穴古墳の装飾壁画に描かれた準構造船（外洋船）に乗る馬の存在であり、「日本書紀」欽明紀一五年に記された軍馬の渡航を暗示させる（原田一九七三）。

以上のような歴史を経て、菊鹿盆地の評造軍は編成された。古墳時代後期（六世紀）に編成された国造軍は、九州島の豪族に均一な負担を強いるものではなく、その動員規模は国造制・部民制が併存する状況下で豪族毎に異なつていたと判断できる（註10）。筑紫縦貫道と接続する菊鹿盆地は、筑紫君磐井の乱後の倭政権下において、火国（肥後国）内陸部における軍事動員の拠点（国造軍の集結地点、兵糧・軍馬等の物資集積地点）であったと考えられる。すなわち、築造期における鞠智城の役割と想定される後方支援機能は、白村江の戦い後に場当たり的に設定されたものではなく、歴史的に形づくられた戦時侵攻体制に立脚したものと結論できる。筑紫国の評造軍や火国の評造軍等を動員することで、はじめて大宰府都城・古代山城群は機能するのである。古代山城の分布は防衛網という要素とともに、評造軍を効率的に運用する単位という要素も複合していると

考えられる。

おわりに

百濟の役以降、倭政権（中大兄皇子称制政権）は、戦時侵攻体制（評制・評造軍）を対処的に改変して戦時防衛体制を構想したと考えた。この防衛体制は、古代山城や官道・烽、すなわち「施設」の検討から繰り返し議論されており、すでに主要な論点は出尽くした感がある。そこで、本研究では「古代山城（施設）をいかに運用して防衛体制を築いたか」ではなく、「評造軍（人）をいかに運用して防衛体制を築いたか」という視点に重点を置いて議論を進めた。戦時防衛体制の要となる評造軍は、五二七・五二八年に勃発した筑紫君磐井の乱後に編成された国造軍・ミヤケネットワーク上に存在する。

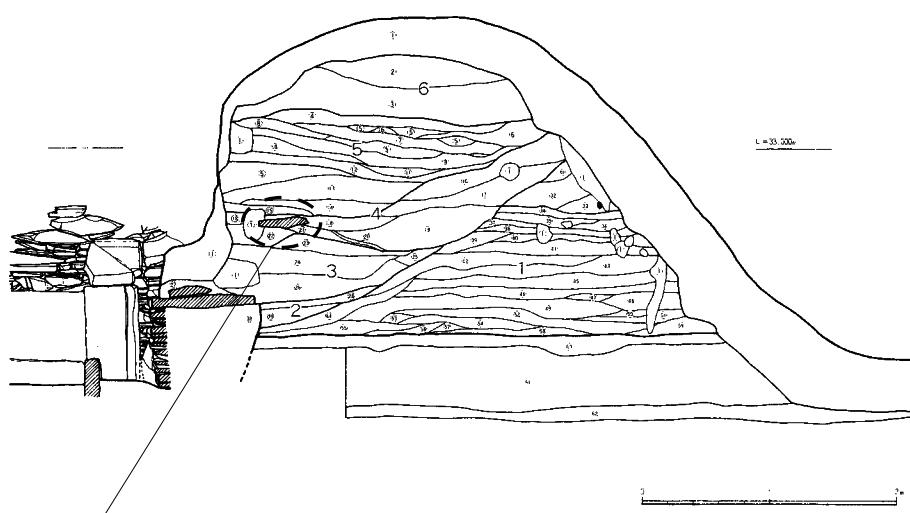
鞠智城がある菊鹿盆地は、その歴史的事件・経過の舞台であり、筑紫縦貫道にも接続することから九州島内でも早期に国造軍編成が進んだことが推測できる。菊鹿盆地の豪族としては、火君一族に連なる火中君が有力視されているが、残念ながら確証は得られていない（註11）。しかし、百濟の役にいたる筑紫国造の軍事動員状況を見ると、菊鹿盆地の人々にも多くの負担が強いられたと思われる。

国造軍・ミヤケネットワークを支えたのは、六世紀に形成されつあつた交通網であり、筑紫君磐井の台頭要因の一つに「筑紫縦貫道」の存在を想定した。乱後の倭政権は、事実上、この大動脈を接収することで九州島内陸部の物資集積と効率的な国造軍動員が可能な環境を手中に収めたと言える。本研究では火国の領域設定を検討したが、筑紫国も玄界灘と有明海にまたがる南北に伸びた歪な領域を形成する。形成要因は複数あるが、その一つに「筑紫縦貫道を通

じて台頭した筑紫君」、「筑紫縦貫道を通じて動員された筑紫国造」の姿もある。この筑紫縦貫道は戦時防衛体制下で最重要視された陸路であり、南北の要所で水城・小水城、とうれぎ土塁・関屋土塁、上津土塁が塞ぎ、大野城・基肄城・高良山古代山城・女山古代山城が見下ろす。この大動脈に古墳時代より接続してきたのが菊鹿盆地である。倭政権が構想する対馬島・壱岐島・筑紫国を主戦場とする評造軍の動員において、鞠智城は九州島中央部（肥後国）の最前線拠点と評価できる。

最後に、本研究の基礎となつた横穴式石室墳の調査方法について所見を述べる。近年のSfMやドローン技術の進展により、歴史学は新たな展開を迎えるつつある（木村二〇一九）。甲元眞之氏が危惧した石室天井見上げの記録も、調査者の問題意識に関わらず、技術革新により果たされようとしている（甲元二〇一七）。ただし、これららの記録技術は表面情報に特化したものである。墳丘内部（地中）の情報が調査者の問題意識に依る状況に変わりはない。墳丘内の調査で石列や土塊列の存在が認知されて久しいが、一方で力学的に石室構造・墳丘構造と無関係に埋没する情報については、問題意識が向けられていない。横穴式石室墳の構築では、見込みで石材を集積して組み上げるため、不要石材が高確率で発生し、壁面積み上げの作業面に置いたまま盛土を積み上げる事例が多く見られる。本研究の主対象となつた肥後型石室は集積石材が膨大なため、確実に不要石材が発生する。これらをどのように処理しているかを探ることで、より精緻な情報が記録できる。実際に墳丘断ち割り調査を実施した塚坊主古墳の調査記録でも、石積み作業面での不要石材の埋没を見出すことができる。このような石材搬入路や作業面・作業姿勢等の

問題意識は低く、横穴式石室墳の調査方法にはいまだ改良点があることを提起して結びとする。



墳丘後円部盛土（石室裏込め盛土）中に埋没した不要石材

石室構造とは力学的に無関係に埋没する石材で、もともとは石室壁面に使用するために持ち込まれたものである。石室壁面の構築にあたっては下部・隣接石材との組み合わせを現場で調整するため、複数の石材を「見込み」で作業場所（壁面裏込め盛土上）に運び込む。このため、「見込み」が外れてしまう不要石材も、少なからず発生する。不要石材は壁面の別箇所に使用する他、作業場所から撤去し、墳丘内石列（土留）・墳丘外護石列・石室敷石等に転用する場合もある。また、作業場所に放置したまま盛土で覆う（埋め殺し）場合も多い。

このような不要石材について、三次元的に情報を記録することで、石室構築時の作業位置や作業姿勢・作業単位、さらには大型石材の搬入や天井石架構作業の小工程等の実証的解明につながる。

第11図 塚坊主古墳盛土内の不要石材

【註】

註 1・「地域勢力築造説」については、向井二〇一七で学史的整理とその問題点が明らかにされている。

註 2・「戦時下における古代山城は、開戦当初から「戦場（防御施設）」としての利用を想定しておらず、まずは①兵士の集結場所（派兵）、②兵糧・兵器の守衛（供給）、③高所からの敵軍把握としての機能を想定していると考えられる。主戦場は軍勢の進軍速度が速い交通路（官道）であり、

弓矢を用いた長距離戦闘を主体としていた。戦局は弓矢・弩矢をかいくぐった歩兵・騎兵の突撃に左右され、追撃では騎兵が主体的に用いられたと考えられる。基本装備は兵士各人の自備を原則とするが、消耗品である矢は公的に備蓄されていたことは確実である。⋮（中略）⋮迎撃に失敗した際に、はじめて古代山城が防御施設としての運用が本格化する。日本列島における古代山城の具体的な戦闘描写の記録がなく、その運用の実像は依然として論拠に乏しい。現代の合理的思考に基づけば、③高所からの敵軍把握を基に襲撃地点の城門・城壁（土壘）に兵士を集結させることを基本戦術にしていたと推測できる。敵軍は進軍速度が遅くなる傾斜地を登るため、敵軍の視認を経た対処的戦闘を想定していくだろう。そして、当然ながら④高所からの長距離戦闘が主体であったことは容易に考えられる」（小嶋二〇一六c）。

註 3・小田富士雄氏は、築城記事がない鞠智城は第二次防衛網と位置付けれる（小田二〇一六）。

註 4・古墳時代の研究において、国家祭祀としての沖ノ島祭祀の開始に伴い、沖ノ島を経由した朝鮮半島への直接航路が開拓されたとする説が多く見られる。しかし、沖ノ島の自然環境は船団の寄港地（風待ち・補給・停泊スペース等）に適しておらず、寄港地を示す考古資料も見出せない。加えて、対馬海流が西から東にむけて強く流れしており、航路としての安

全性も疑問視できる。沖ノ島を経由して朝鮮半島へ渡航できること 자체は否定しないが、交易や派兵の船団の主要航路としては不適格であると評価できる。仮にそのような効率的な航路を認めるのであれば、本航路が歴史的に放棄される構造についても言及が求められよう。沖ノ島の重要性は、対馬島・壱岐島・筑紫国の主要航路上からほぼ等距離で目視できる地理的特質にある（小嶋二〇一七a）。

註 5・『日本書紀』記載の集団戦闘を網羅的に検討すると、兵の集結場所として各豪族が居住した「館」が選ばれており、兵の実態が血縁集団と部曲を軸に構成されていたことを示唆する（小嶋二〇一六c）。

註 6・重藤輝行氏より「宋山里型」という分類名を漢城期の横穴式石室に用いるのは避けた方がよいとご助言を頂いた。近年の研究動向を鑑み、当面は百濟型（百濟前期型・百濟中期型・百濟後期型）と呼称する。また、九州島内の範型名称についても、各範型の系統に対する理解が進んだこともあり、適宜見直しを図っている。

註 7・菊池川下流域の稻荷山古墳は同地域の動向を探る上で重要な古墳である。埴輪共通編年IV期以降の埴輪を伴うと見られるが詳細は不明である。古墳構築技術の様相を見ると、同地域は肥後南部との繋がりが強い。刀形石製表飾に見られる継体大王との政治的紐帶も重要因素である（斎籬二〇一四）。また、石製表飾・埴輪を統合した埴丘表飾の変遷をみると、岩戸山古墳以前の八女古墳群では累代的に大王墓造営に伴う埴輪製作技術の拡散、石製表飾を含めた埴丘表飾組成の影響を受けており、長期的に畿内中枢との関係が認められる。

註 9・向井一雄氏は「神籠石」が古代山城を表す名称として不適格な呼称であることは明らかなのだが、学界では慣習としてこの名称を使い続けていることを問題視し、「遺跡の多様なあり方を先入観なしに見定める上にもまず「古代山城」として括して捉えるべき」と提起する（向井二〇一九ab）。筆者も同意見であり、高良山神籠石ではなく、高良

山古代山城と表記した。

註10 「筑紫国の豪族を例に挙げれば、宗像地域では「筑紫所居三神」を頂点とする地域秩序が形成されており、倭政権より祭祀を委託されていた宗形君や配下の人々は「充神民」であった。『日本書紀』には、中央氏族による部曲の割譲に際し徹底抗戦する様が記されている（履中紀五年）。筑紫所居三神（沖ノ島祭祀）を重要視する倭政権は、その権益を收奪できず、「神郡」として律令国家内部に取り込むことになった（小嶋二〇一八a・二〇一九a・二〇一〇b）。大海人皇子と尼子娘の婚姻も、倭政権と宗形君の距離感を暗示させる。

註11 筑紫君と火君（火中君）の複姓氏族である筑紫火君は、『続日本後紀』嘉祥元年八月六日条で肥前国養父郡に居住していることが知られている。時期差があり、古墳時代と直結することはできないが、同地の首長墓・庚申堂塚古墳や岡寺古墳の墳丘表飾には、野津古墳群と八女古墳群の双方の特徴を受け継ぐ、肥後南部系埴輪が用いられている（小嶋二〇一九b）

【参考文献】

- 青木敬 二〇〇三『古墳築造の研究－墳丘からみた古墳の地域性－』六一
書房
- 池田栄史 一九八二「天草における横穴式石室の一例」『肥後考古』第二号
肥後考古学会
- 稻田孝司 二〇一二「古代山城の技術・軍事・政治」『日本考古学』第三四
号 日本考古学協会
- 井上翔 二〇一六「鞠智城と東北の城柵官衙」『鞠智城と古代社会』第四号
熊本県教育委員会
- 筌瀬明宏 二〇〇四「古墳墓壙構築技術の諸様相－肥前地域を中心にして」『福岡大学考古学論集』福岡大学
- 宇野慎敏 二〇一一「肥後横穴墓の動向とその背景」『熊本古墳研究』第四

号 熊本古墳研究会

宇野慎敏 二〇一二「肥後・初期横穴式石室に見る3つの系譜とその背景」
『熊本古墳研究』第五号 熊本古墳研究会

小田富士雄 二〇〇七「筑紫君磐井の乱と火（肥）君」「大王の棺を運ぶ実験航海・研究編」石棺文化研究会

小田富士雄 二〇一六「大宰府都城の形成と東アジア・「天智紀」山城出現の歴史的背景」『季刊考古学』第一三六号 雄山閣

小田富士雄 二〇一八「成立期大宰府都城調査の成果と検討」『大宰府の研究』高志書院

龜井輝一郎 二〇一一「古代の宗像氏と宗像信仰」『宗像・沖ノ島と関連遺産群研究報告I』「宗像・沖ノ島と関連遺産群」世界遺産推進会議
龜田修 一二〇一四「古代山城は完成していたのか」『鞠智城跡II・論考編』『熊本県教育委員会

龜田修 一二〇一八「繕治された大野城・基肄城・鞠智城とその他の古代山城」『大宰府の研究』高志書院
龜田修 一二〇一九「古代山城の成立と変容」『古代山城の成立と変容』鞠智城・古代山城シンポジウム二〇一八成果報告書 熊本県教育委員会（※二〇一八初出）

蒲原宏行 二〇一九『弥生・古墳時代論叢』六一書房
狩野久 二〇一〇「瀬戸内古代山城の時代・建築から廃止まで」『坪井清足先生卒寿記念論文集』坪井清足先生の卒寿をお祝いする会
河野法子 一九八二「石障系古墳の一考察」『肥後考古』第二号 肥後考古学会

木村龍生 二〇一三「須恵器から見た地域間交流の一様相」『古墳時代の地域間交流I』第一六回九州前方後円墳研究会
木村龍生 二〇一四「鞠智城の役割に関する一考察・熊襲・隼人対策説への反論」『鞠智城跡II』熊本県教育委員会

木村龍生 二〇一六「土器の様相からみた古代山城」『築城技術と遺物から

見た古代山城』熊本県教育委員会

木村龍生二〇一八「鞠智城の築城とその背景」『大宰府の研究』高志書院

木村龍生二〇一九「SfMを利用した石室の保存・管理と活用について」

『熊本古墳研究』第七号 熊本古墳研究会

藏富士寛一九九七「石屋形考・平入横口式石棺の出現とその意義」『先史学・考古学論究II』龍田考古会

藏富士寛一九九九「肥後地域の横穴式石室」『九州における横穴式石室の導入と展開』九州前方後円墳研究会

藏富士寛二〇〇二「石棚考・九州における横穴式石室内棚状施設の成立と展開」『日本考古学』第一四号 日本考古学協会

藏富士寛二〇〇七a「北部九州の埋葬原理と石室構造」『近畿の横穴式石室』横穴式石室研究会事務局

藏富士寛二〇〇七b「九州の横穴式石室」『日本考古学協会』二〇〇七年度熊本大会研究発表資料集 日本考古学協会二〇〇七年度熊本大会実行委員会

藏富士寛二〇〇九「九州北部の横穴式石室」『考古学ジャーナル』No.五八三ニュー・サイエンス社

藏富士寛二〇一〇「石屋形・石棚・石屋形・石棚の出現・展開とその歴史的意義(予察)」『先史学・考古学論究V』龍田考古会

藏富士寛二〇一一「玄界灘沿岸」「九州島における古墳埋葬施設の多様性」第一四回九州前方後円墳研究会九州前方後円墳研究会

藏富士寛二〇一九「開かれた棺」が示すつながり・横穴式石室から読み解く「火君」と「紀氏」・『開かれた棺・紀伊の横穴式石室と黄泉の世界』和歌山県紀伊風土記の丘

藏富士寛二〇二〇「複室構造横穴式石室・九州地域の横穴式石室に対する構造的理解に向けて」『横穴式石室の研究』同成社

甲元眞之二〇一九a『瀬戸内』

甲元眞之二〇一九b「磐井の戦争と考古学資料」『熊本古墳研究』第七号

熊本古墳研究会

小嶋篤二〇一一「大宰府の兵器・大宰府史跡蔵司地区出土の被熱遺物」

『九州歴史資料館研究論集』三六 九州歴史資料館

小嶋篤二〇一二「墓制と領域・胸肩君一族の足跡」『九州歴史資料館研究論集』三七 九州歴史資料館

小嶋篤二〇一三「IV群系埴輪の研究・嘉穂型埴輪と肥後南部型埴輪」『古墳時代の地域間交流I』九州前方後円墳研究会

小嶋篤二〇一四a「大宰府保有兵器の蓄積過程」『古代武器研究』一〇

小嶋篤二〇一四五「古墳時代後期の埋葬施設と墳丘」『古墳時代の地域間交流3』九州前方後円墳研究会

小嶋篤二〇一四b「小郡官衙遺跡出土鉄鏃の研究」『九州歴史資料館研究論集』三九 九州歴史資料館

小嶋篤二〇一五「古墳時代後期の埋葬施設と墳丘」『古墳時代の地域間交流3』九州前方後円墳研究会

小嶋篤二〇一六a「大宰府の軍備に関する考古学的研究」平成二五、二七年度科学研究費助成事業若手研究(B)研究成果報告書九州国立博物館・福岡県立アジア文化交流センター

小嶋篤二〇一六b「鞠智城築造前後の軍備」『鞠智城と古代社会』第四号熊本県教育委員会

小嶋篤二〇一六c「兵器の様相から見た古代山城」『築城技術と遺物から見た古代山城』熊本県教育委員会

小嶋篤二〇一六d「終章 宗像・沖ノ島と大和朝廷」『宗像・沖ノ島と大和朝廷』九州国立博物館特別展図録九州国立博物館

小嶋篤二〇一七a「埴輪に見られる技術複合」『埴輪論叢』第七号 墓輪検討会

小嶋篤二〇一七八a「前方後円墳の終焉」から見た胸肩君」『沖ノ島研究』第四号「宗像・沖ノ島と関連遺産群」世界遺産登録推進会議

甲元眞之二〇一九b「大宰府の兵器と工房」『大宰府の研究』高志書院

小嶋篤二〇一八c「古墳時代後期における横穴式石室墳の展開・日韓交流の視点から」『海峡を通じた文化交流』九州考古学会・嶺南考古学会第一回合同考古学大会

小嶋篤二〇一九a「宗像・沖ノ島と胸肩君」『大宰府学研究』九州国立博物館アジア文化交流センター研究論集第一集九州国立博物館

小嶋篤二〇一九b「肥後南部型埴輪の研究」『埴輪論叢』第九号 境輪検討会

小嶋篤二〇二〇a「筑後の横穴式石室墳・筑後型石室と八女型石室」『福岡大学考古学論集三』武末純一先生退職記念事業会

小嶋篤二〇二〇b「神仏と向き合う人の歴史」『筑紫の神と仏』九州国立博物館

小林達雄一九九四「形式・型式・様式論」『縄文土器の研究』小学館

小松讓一九九五「肥前小城に築造される玄門構造の特異な横穴式石室」『佐賀考古』第三号 佐賀考古談話会

小松讓一九九九「肥前東部地域の横穴式石室・導入と展開および終末」『九州における横穴式石室の導入と展開』九州前方後円墳研究会

小森哲也二〇一二「地域間交流としての石棺式石室・中九州・山陰そして東国の動向」『日本考古学』第三四号 日本考古学協会

齊藤大輔二〇一四「北部九州における装飾武器の特質とその背景」『古墳時代の地域間交流2』九州前方後円墳研究会

齊藤大輔二〇一七「武装からみた善一田古墳群と六世紀の西北九州」『乙金地区遺跡群23』大野城市文化財調査報告書第一五九集 大野城市教育委員会

齊藤大輔二〇一八「後期古墳出土武装具の評価をめぐる諸問題・北部九州と東国との対比から」『平成三〇年度九州考古学会総会研究発表資料集』九州考古学会

酒井芳司二〇一八「筑紫国造と評の成立」『大宰府の研究』高志書院
重藤輝行二〇二〇「九州における横穴式石室の展開・編年・地域性・階

層性の概観」『横穴式石室の研究』同成社

角浩行二〇二〇「壱岐島の横穴式石室と九州」『伊都国歴史博物館紀要』第一五号 糸島市立伊都国歴史博物館

高木恭二一九九三「横穴式石室の地域性九州地方」『季刊 考古学』第四五号 雄山閣

高木恭二一九九九「横穴式石室の石材」『九州における横穴式石室の導入と展開』九州前方後円墳研究会

高木恭二一九九九「菊池川流域の古墳」『マロ塚古墳出土品を中心とした古墳時代中期武器武具の研究』国立歴史民俗博物館研究報告第一七三集 国立歴史民俗博物館

高木正文二〇一九「熊本県玉名地域の初期装飾横穴墓・塚坊主古墳と同時期の横穴墓」『古墳と国家形成期の諸問題』山川出版社

長直信・中島圭二〇一三「福岡県内の八女系須恵器について」『古墳時代の地域間交流1』九州前方後円墳研究会

津曲大祐二〇〇四「博多湾沿岸地域の石室構築技術」『福岡大学考古学論集』福岡大学考古学研究室

出宮徳尚二〇〇二「古代山城跡の検証覚書・その用兵の具のコンセプトを求めて」『環瀬戸内海の考古学』下巻 古代吉備研究会

出宮徳尚二〇一〇「古代山城跡の検証覚書II - 神籠石系山城の用兵の具観からの検討 - 」『坪井清足先生卒寿記念論文集』坪井清足先生の卒寿をお祝いする会

中島圭二〇〇九「若杉今里窯跡の須恵器生産の位置づけ」『長者の隈古墳若杉今里窯跡』福岡大学考古学研究調査報告第八集 福岡大学人文学部考古学研究室

中島圭二〇二〇「筑前・筑後における古墳時代後期の土師器大型高壙」『福岡大学考古学論集3』武末純一先生退職記念事業会
西岡千絵二〇〇五「飛燕式鉄鎌の研究」『七隈史学』第六号 七隈史学会
西谷正二〇一八「大宰府の防衛体制をめぐつて・羅城と閔、防と烽」『大

宰府の研究』高志書院

西山由美子・濱田智美 一九九七「椿原古墳の線刻壁画について」『椿原古墳』

宇土市埋蔵文化財調査報告書第二〇集 宇土市教育委員会

橋本達也 二〇二〇「地下式横穴墓の構造」『横穴式石室の研究』同成社

原田大六 一九七三『新稿 磐井の叛乱』三一書房

藤原哲 二〇一八『日本列島における戦争と国家の起源』同成社

古城史雄 二〇〇三「有明海沿岸の横穴式石室と韓半島の横穴式石室」『熊本古墳研究』創刊号 熊本古墳研究会

古城史雄 二〇〇七「肥後の横穴式石室について」『日本考古学協会二〇〇七年度熊本大会研究発表資料集』日本考古学協会二〇〇七年度熊

二〇〇七年度熊本大会研究発表資料集』日本考古学協会二〇〇七年度熊本大会実行委員会

古城史雄 二〇〇九a「天草の横穴式石室」『八代海沿岸地域における古墳時代在地墓制の発達過程に関する基礎的研究』二〇〇六～二〇〇八年度

科学研究費補助金研究成果報告書 熊本大学文学部

古城史雄 二〇〇九b「肥後型横穴式石室の展開」『考古学ジャーナル』五八三 ニュー・サイエンス社

古城史雄 二〇一〇「肥後ににおける初期横穴式石室出現の背景」『先史学・考古学論究V』龍田考古会

古城史雄 二〇一一「八代海沿岸地域における後期古墳の再検討 -野津古墳群・大野窟古墳を中心として-」『熊本古墳研究』第4号 熊本古墳研究会
調査報告書』水川町文化財調査報告書第2集 水川町教育委員会
古城史雄 二〇一二a「横穴式石室からみた大野窟古墳」『大野窟古墳発掘報告書』水川町文化財調査報告書第2集 水川町教育委員会
古城史雄 二〇一二b「鬼の岩屋式石室」について』『熊本古墳研究』第五号 熊本古墳研究会

古城史雄 二〇一二a「横穴式石室からみた大野窟古墳」『大野窟古墳発掘報告書』水川町文化財調査報告書第2集 水川町教育委員会
古城史雄 二〇一二b「鬼の岩屋式石室」について』『熊本古墳研究』第五号 熊本古墳研究会
古城史雄編 二〇二〇『八代海周辺の装飾古墳・発生と展開』熊本県教育委員会

松村一良 一九九四「上津土塁跡」『久留米市史』第二二巻 久留米市

宮崎貴夫 二〇一九『長崎地域の考古学研究』昭和堂

向井一雄 二〇一四「鞠智城の変遷」『鞠智城跡II 論考編』熊本県教育委員会

吉川弘文館
向井一雄 二〇一九a「石神・磐座・磐境といわれているもの」『古代山城と祭祀・寺院』第五九回古代山城研究会例会 古代山城研究会

向井一雄 二〇一九b「神籠石系山城の捉え方・築城年代・築城主体論の克服」『古代山城の成立と変容』鞠智城・古代山城シンポジウム二〇一八成果報告書 熊本県教育委員会 (※二〇一八初出)

森公章 二〇一九「[海北]から[海西]へ・古代国家成立の画期」『古墳と国家形成期の諸問題』山川出版社
柳沢一男 一九九〇「横穴式石室の導入と系譜」『季刊考古学』第四五号 雄山閣
柳沢一男 二〇〇三「複室構造横穴式石室の形成過程・羨道間仕切り型の建築系譜」『新世紀の考古学』纂修堂

柳沢一男 二〇〇五「横穴式石室の成立と普及」『日本の考古学』下巻 学生社
柳沢一男 二〇〇九「九州中北部における横穴式石室の形成と伝播」『考古学ジャーナル』五八三 ニュー・サイエンス社

柳沢一男 二〇一二a「横穴式石室からみた大野窟古墳」『大野窟古墳』新泉社
矢野裕介 二〇一四「筑紫君磐井と「磐井の乱」岩戸山古墳』新泉社
矢野裕介 二〇一八「鞠智城の変遷に関する考察」『大宰府の研究』高志書院
矢野裕介 二〇一九「有明海沿岸における古代山城の年代論」『大宰府学研究』九州国立博物館アジア文化交流センター研究論集第一集 九州国立博物館